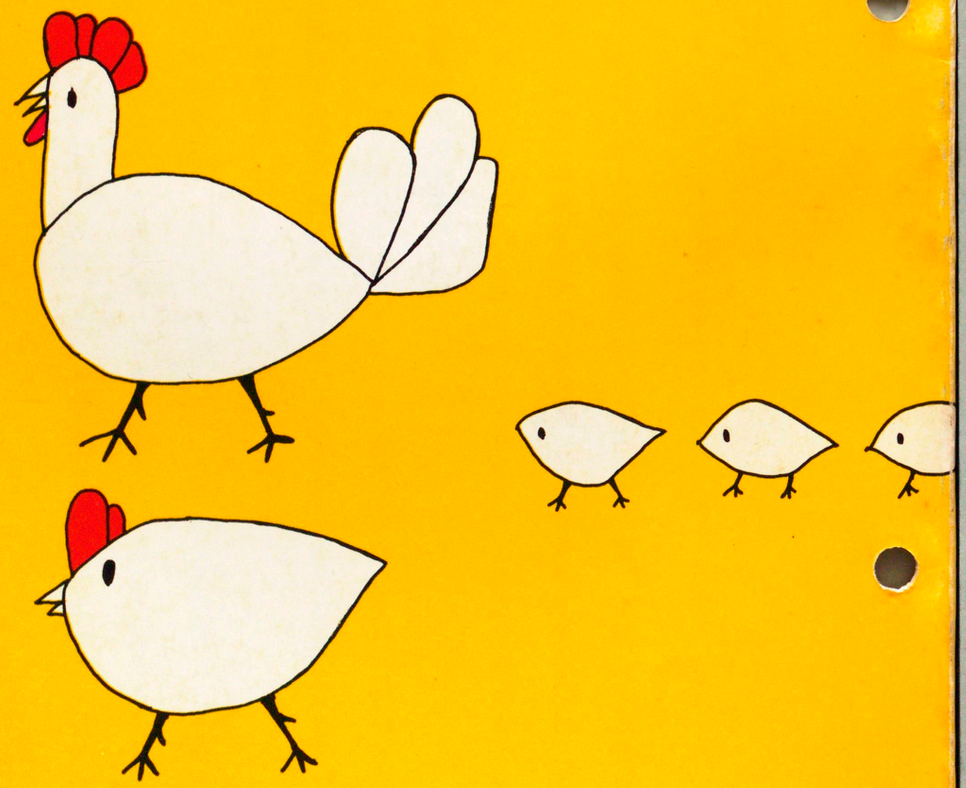
ふじみの



No. 21 1982
東京農大畜友会

巻頭言

畜友会委員長　倉　橋　正　巳

年々畜友会活動も、会員の協力で大変充実してきました。又、期待に添える様、授業には出なくとも、畜友会室には顔を出す気持ちで、一生懸命やりましたが、まだまだ努力が足らず、やり残したことがたくさんあり、果たしてどれだけ会員みんなの為に働けたか、大いに疑問が残ります。

私が入学した頃に比べ、女子学生も倍以上にふえ、華やかな、ナウい学科のひとつとなりましたが、相変らず農大の伝統を受け継いでいる学科のひとつでもあり、収穫祭等の行事をみれば、よくわかることです。

畜友会の三十年もの歴史の中で、多くの先輩方が、いろんな事を教えてくれました。私も、農大精神忘れることなく、畜産の学生であることに、ほこりを持ち、畜産学科だけしかない自慢できる何かを作りあげ、それを後輩諸君に受け継げたら良いと考えています。

ふじみの　第21号

目次

巻頭言 …… 畜友会委員長　倉橋正巳　1

御一報
ニワトリのルーツをたづねて …… 畜産学科長　田中一栄　4
アメリカの酪農　ミシガン州を訪ねて …… 教授　渡辺誠喜　6
教授　吉村喜彦　10

農場だより
すべてが絵になるアメリカ東部の酪農 …… 講師　大谷忠　13

北海道別海町から
出会い …… 畜産二年　津田新哉　16
ベコの唄 …… 別海町　佐藤徳男　19

サークルレポート
農友会農村調査部の今日における位置 …… 農友会農村調査部　20

詩・随筆 …… 22

研究室だより
昭和五十六年度卒業論文題目 …… 32
○家畜育種学研究室 …… 32
○家畜衛生学研究室 …… 33
○畜産経営学研究室 …… 35
○家畜飼養学研究室 …… 37
○家畜生理学研究室 …… 39
○家畜繁殖学研究室 …… 40
○畜産物利用学（肉）研究室 …… 42
○畜産物利用学（乳）研究室 …… 44

畜友会だより
昭和五十六年畜友会行事報告 …… 45
昭和五十六年畜友会会計報告 …… 46
第八十九回収穫祭畜産学科会計報告 …… 47
第八十九回収穫祭報告 …… 48
昭和五十六年度第八十九回収穫祭役員・畜友会役員 …… 49
畜友会規約 …… 51
編集後記 …… 56

御一報

畜友会への期待と提言

畜産学科長　田中一栄

畜産学科が千葉県茂原の地から世田谷のキャンパスに移転したのは昭和三十六年の春であるが、その二年前から新入生は世田谷で講義を受けており、三・四年次生のみ茂原と云う変則的な時期があった。この頃から学生間の連絡を密にしたいとする要望が高まり、それはやがて畜友会の発足への発展し、そして機関誌「ふじみの」の第一号が刊行されたのも丁度移転の年であった。

その当時の畜産学科は、現在の七号館付近にあった旧講堂を仮住いとしていたが、それはベニヤ板で間仕切りしただけのとても研究室と云える代物ではなかった。その後、農学総合研究棟（二号館）の竣工にともなって、繁殖学・育種学・飼育学および経営学の四研究室がそれに移り、さらに一～二年おくれて家畜診療所や畜産製造関係の建物が完成したので、衛生学および利用学の二研究室（当時は獣医学研究室および畜産製造学研究室）の引越が終了し、こゝにようやく現在の六専攻の基盤である研究室の形態が一応は整った。しかしまだ各研究室における実験設備等は甚だ貧弱で不備な点が多く、今日に見られるような充実した種々の設備に接している諸君にはとても想像が出来ないであろう。しかし、この様な逆境の中にあってもそれらを克服し、それぞれの創意と努力によって立派な研究がなされて来た事は誠に敬服の極みであり、この点、諸君も先輩諸氏を大いに見倣って欲しいものである。

さてこの様な経緯のうちに、畜産学科の発展と共に歩んで来た畜友会もいつの間にか二十才の成人に達し、ま

た七〇〇余名を擁する大世帯になった。その事業内容も年々活発になり、新入生の歓迎に始まり卒業生の送別に到る一連の行事が実施されている。そしてこれらの多彩な行事は毎年定期的に繰り返されて最近では全く軌道に乗ったかに見えるが、その反面やゝもすれば惰性に流されて聊かマンネリズムの感がないでもない。勿論、役員諸君の苦労は充分認めるが、たゞ前年に踏襲するだけでなく常に改善に向っての努力を期待する。また畜産学科の学生諸君も、各自が会員であることに自覚し、畜友会本来の目的を達成するために進んで協力されんことを望む。そもそも畜友会は、学生相互の親睦と知識の啓蒙を計るために先輩諸氏が設立され、以来その意志を今日まで受継いでいる。おそらくそれは他学科にも類を見ない団体であり、今後も大切にして行きたいものである。

選ばれて畜産学科に入学し、また同時に畜友会のメンバーである諸君にこゝで敢えて提言したいことは、各自の大学生活に対する心構えである。もとより畜産分野の専門的な知識や技術を身に付けることは大切であるが、それにもまして物事に対する正確な判断力を養い、自己の意志を確立することが大切ではないだろうか。自分自身の判断や方針に自信がないと、迷ったり悩んだりして主体的な生き方が出来ず、従って人生の満足感は低下する。自分をしっかり確立していること、自分自身を信頼していること、そうした心の持ち方が諸君の幸福感に大きく拘ってくる。それはまた対人関係においても同様に気持ちの余裕となって現れてくるであろう。このことは大学生活において真の友を得るためにも必要である。大いに自重自戒すると共に、自信をもって行動し精進されるよう望みたい。諸君の四年間の学生生活は決して長くはないが、しかし焦ることなく毎日を着実にそして有意義に過して頂きたい。

今年度も間もなく幕を閉じ、やがて新しい会員を迎えようとしている。大学の創立九十周年にやっと成人に達した畜友会の前途には洋々たるものがある。それらは全て諸君の双肩に掛っていることに心して、益々の発展に尽力されることを願ってやまない。

ニワトリのルーツをたずねて

教授　渡辺誠喜

はじめに

昨年（昭和五十五年）十一月二十二日より同年十二月十五日まで、二十四日間の予定で、インド共和国、ならびにスリーランカ共和国における野鶏の調査に参画したので、この機会に野鶏と家鶏の関係などにつき述べてみたい。

今回の調査は文部省科学研究費（海外学術調査）によるもので、その研究題目は「野鶏に関する生理・生態学的研究」であり、調査隊の構成メンバーは隊長として本学科の一戸健司教授、隊員として渡辺忠男講師、農学科の田辺猛助教授、農場の西脇充講師、千葉市立動物園長の宗近功氏並びに筆者である。調査研究の内容は六名のメンバーがそれぞれ専門とする六部門であるが、その成果は何れ発表の機会があるものと思われるので、ここでは野鶏の一般的事項並びに野鶏と家鶏の関係にふれることにした。

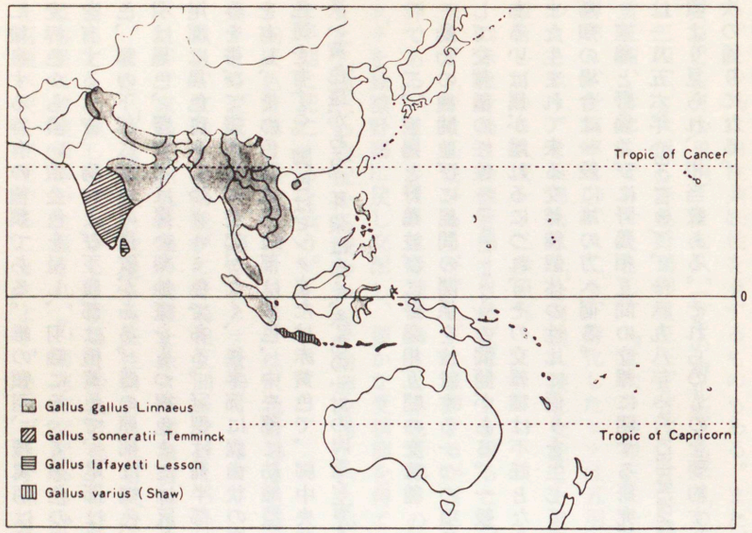
一、野鶏の種類とその分布

現在、畜産業として飼養されている実用鶏をはじめ、愛玩用として飼われている日本鶏にいたるまで、これらはすべて家鶏（Gallus gallus domesticus）と呼ばれ、約二百余の品種を含んでいる。

一方、現存する野鶏には四種があり、赤色野鶏（Gallus gallus）、灰色野鶏（Gallus sonneratii）、緑襟（アオエリとも云う）野鶏（Gallus varius）およびセイロン野鶏（Gallus lafayetii）がカシミールからインドを経て東南アジアおよび南太平洋諸島におよぶ広大な地域に棲息している（図1参照）。

㈠赤色野鶏（Red jungl fowl）、学名（Gallus gallus）

外観は雌雄とも岐阜地鶏によく似ている。雄は頭部が赤褐色で、翼肩、鞍部、胸部が黒色である。主尾羽は黒褐色で謡羽は光沢のある緑黒色である。雌は黒色の梨地斑を有するため一般に濃褐色を呈する。ヒナの背には黒い条斑を有する。冠は単冠で、下顎部に一対の肉垂がある。耳朶は赤色のものと白色のものがあり、脚は鉛色である。これらの遺伝子型は羽色および羽性について、AACC, ii, blbl, s(s)b(b), $e^{+}e^{+}$, LaLa, SpSp, MoMo, HH, ff, N(N), fefe, nana, apap、冠型について rr, pp, dd, BdBd, 脚色について ididWW であることが推定されている。赤色野鶏の分布は他の野鶏に比べ極めて広く、ゴダヴァリ河以北、中部インドから東海岸に達する地域よりガンジス河を越えベンガルを経てヒマラヤ山麓



第1図　野鶏の分布図（西田　1967より）

につながるアッサムから東へビルマ、タイ、ラオス、カンボジヤ、ベトナム、中国雲南省、四川省、海南島およびフィリピン、更にはマレー半島から南下してシンガポールを経てスダン列島に至り、スマトラ、ジャワおよびセレベスから南太平洋におよんでいる。

㈡灰色野鶏（Grey jungle fowl）、学名（Gallus sonneratii）

外観は雄の頸部は濃灰色で、黄色および白色の横斑があり、覆翼羽は黒色で、尾羽は光沢のある緑色である。冠、肉垂、耳朶は赤色で、脚は揚柳色である。インドのボンベイからマドラスに至る南西部全域に分布している。

㈢緑襟野鶏（Green jungle fowl）、学名（Gallus varius）、別名アオエリ野鶏とも云う。

雄の頭部は黒色で、その羽縁は緑青銅色、副覆翼羽は黒色でその羽縁は橙赤色であり、尾羽は光沢を有した緑色である。また、他の三種の野鶏の尾羽は一四枚であるが、本種のそれは一六枚である。雌の頸部は赤黄褐色で緑の不鮮明な横斑を有する。冠は丸く、緑色と紫赤色のものがあり、肉垂は下顎中央部に一つあり、光沢のある赤、黄および青色のものがある。ジャワ、ロンボック島をはじめその周辺諸島に棲息している。

㈣セイロン野鶏（Ceylonese jungle fowl）、学名（Gallus lafayettii）

この野鶏はセイロン島（現スリーランカ共和国）のみに棲息する特有の種類である。雄の頸羽、覆翼羽は淡い麦桿色から濃い黄金色を呈し、羽軸にそって黒色の縦縞を有する。背、胸および下腹部は橙黄色で、尾部は縁青色、頸の下部に紫色の斑紋がある。雌の頭部は褐色、岬羽は黒色、覆翼羽は黒い梨地斑をもつ褐色または灰色で、尾部は黒色斑をもつクルミ色である。冠型は前半部は丸みを帯びて鋸歯状の突起がなく、後半部に鋸歯状の突起を有し、その色調は周辺部は赤色、中央部に紡錘型の黄色斑を有する。脚色はピンクまたは赤黄色で、脚中央部に淡い黄色斑がある。耳朶は赤く、赤色の一対の肉垂を有する。

二、家鶏と野鶏並びに野鶏相互間の交雑種

動物の種間並びに属間の関係を検討する一つの項目として交雑種の妊性（fertility）の問題がある。一般に種あるいは属が離れるにつれ、その交雑種は不妊となり、また生まれて来る交雑種個体の性比に偏りを生じて来る。鳥類の場合は一般に雄の方へ偏る。

家鶏と野鶏並びに野鶏相互間の交雑に関する研究報告は一八五六年（BOLLE）、一八九八年（ACKERMANN）頃より見られ、相当数ある。それらのものを要約すれば次の通りになる。

㈠ 家鶏と野鶏の交雑

(A) 家鶏(♀)とセイロン野鶏(♂)＝LOTSY & KUIPER によればその F_1 の体は大変小さいが極めて活力がある。F_1 の♂は家鶏(♀)に戻し交配して妊性があり、また F_1 相互の交配により僅かな F_2 を生産しうるが、F_2 のヒナは育たない。F_1 の♀はよく産卵するが受精卵数は少ない。DERANIYAGALA も F_1 同志の交配で子孫を得ている。THOMAS は F_1 ♂を野鶏♀へ戻し交配し、子孫を得ていない。

(B) 家鶏と赤色野鶏＝正逆交配において共に妊性のある F_1 が得られる。F_1 の♀の産卵性は野鶏よりむしろ家鶏に似る。両親への戻し交配並びに F_1 同志の交配でも子孫が得られる。

(C) 家鶏と灰色野鶏＝同一のケージ内に飼養することにより交雑が起こり、雑種は極めて活性がある。F_1 の♂はしばしば妊性があり、野鶏♀に戻し交配すると、高い受性率を示す。また戻し交配で得られた♀は比較的よく卵を産む。F_1 ♀も妊性を有する。

(D) 家鶏と緑襟野鶏＝緑襟野鶏♂と家鶏♀との雑種は両親より大きい。F_1 ♂は妊性を有し、F_1 ♀は時々妊性を有する。

㈡ 野鶏相互間の交雑

(A) 赤色野鶏とセイロン野鶏＝雑種は雌雄共に妊性がある、との報告がある。

(B) 赤色野鶏と灰色野鶏＝ACKERMANNその他によれば、灰色野鶏(♂)と赤色野鶏(♀)との交配により受精率は低いが得られた F_1 の成長は速く、大変勇敢である。F_1 は共に妊

性を有し、F_1 同志の交配により F_2 を得ることも可能である。この F_2 は両性共妊性を有するものもある。また、MOREJOHN (1967) は七八、二％の孵化率を得、F_1 の卵重は二四、〇瓦（但し赤色野鶏卵重三三、九瓦、灰色野鶏卵重三四、九瓦）であったとし、F_2 世代の種卵三二一個を孵卵し、受精率七〇、八二％、孵化したヒナは五羽であったと云う。なお同氏は F_1 を両親へ戻し交配した結果も報告している（表一～二参照）。

(C) 赤色野鶏と緑襟野鶏＝自然交配で F_1 を得ることが出来る。F_1 ♂は妊性があるが、F_1 ♀は産卵するが常に無精卵である。STEINER は緑襟野鶏♂と赤色野鶏♀の間の F_1 ♀を緑襟野鶏に戻し交配し、僅かな受精卵を得ている。また F_1 同志の交配から幾つかの受精卵を得ているが、胚は早期に死亡すると云う。

(D) 灰色野鶏と緑襟野鶏＝FINN は灰色野鶏♂と緑襟野鶏♀との交配により二羽の♂ヒナを得ている。

以上、家鶏と野鶏並びに野鶏相互間の交雑について述べたが、家鶏と赤色野鶏の交雑を除き、雑種個体は得難く、また F_1 個体同志の交配から妊性のある F_2 世代を多数得ることは難しい。しかるに家鶏と赤色野鶏との交配では容易に雑種個体が生産され、F_1 同志の交配あるいは F_1 を両親へ戻し交配することにより、それぞれ子孫を得ることも可能である。

表 1.　赤色野鶏(♀)と灰色野鶏(♂)との交配による種間雑種の成績

入卵数	受精卵数	死亡胚数	孵化数	受精率	孵化率
115	78	17	61	66.3(%)	78.2(%)

表 2.　赤色野鶏と灰色野鶏間の交雑種の戻し交配による成績

交配	入卵数	受精卵数	死亡胚数	孵化数	受精率	孵化率
灰色野鶏♂ × 灰色野鶏♀	45	27	18	8	51.0(%)	29.6(%)
灰色野鶏♂×F_1（灰色野鶏×赤色野鶏）♀	28	23	21	2	80.2	8.8
赤色野鶏♂×F_1（灰色野鶏×赤色野鶏）♀	28	23	22	1	80.2	4.3
赤色野鶏♂ × 赤色野鶏♀	333	196	98	98	58.8	50.0

三、家鶏の祖先

四種の野鶏のうち、赤色野鶏の形態並びに行動と家鶏のそれとの間に最も類似点が多く、しかも前述の如く自然状態においても容易に交雑し、幾世代も子孫を作ることが出来ることなどより、DARWIN (1868) は赤色野鶏が家鶏の祖先であると云う一原説を樹てた。現在も多くの学者がこの説を支持している。

これに対し、次のような論拠から二種以上の野鶏が家鶏の成立に関係しているとし、多原説を唱える学者もいる。すなわち、家鶏は品種によってその形態が極めて異なり、例えば地中海沿岸種のレグホーンやミノルカなどの卵用種とアジア系のコーチンやシャモなどの重種との差異を説明するに二種以上の野鶏が家鶏の成立に関与したと主張している。この学説を支持する学者として、古くは TEGETMEIER (1878) がおり、最近では SANDNES (1957) および DANFORTH (1956) らが交雑実験の結果あるいは形態的観察などから多原説を支持する意見を述べている。

家鶏の祖先に関しては以上の如く二つの学説があるが、何れを支持しうるか定かでない。野鶏の捕獲並びに飼育下における増殖はなかなか難かしい。しかし、今後、家鶏と各種野鶏の形態的あるいは生理的側面が比較され、各指標遺伝子などが検討されるに従い、明確になるものと信ずる。

アメリカの酪農
ミシガン州を訪ねて

教授　吉村喜彦

一九八一年の夏訪米の機会を得、ミシガン州の酪農家を訪問し、またミシガン州立大学から資料などの入手もあったので少しまとめてみたいと思う。

合衆国の農業統計によると、乳牛飼養頭数が一九七〇年一二〇〇万頭であったのが一九七九年には一〇七八万頭と一〇%の減少をみた。今後も漸減の傾向をたどるものと推察される。しかし、このことはアメリカ酪農の衰退を意味するものではない。

牛乳の総生産量が飼養頭数の減少にもかかわらず反対に増加しており、同じ年度でみると、九七五一ポンドであったのが一一四七一ポンドと一八%も増加しているのである。この現象は、日本において最近一〇ヵ年で飼養頭数が五・六%増加して一九〇万頭になり、乳量の増加となったのと本質的に異っている。

すなわち、アメリカの場合は、飼料の自給率が一〇〇%であり、経営条件が有利であるにもかかわらず、より経営合理化の方向を指向しているのである。因みに、表

1の乳牛一頭当りの乳量が過去一〇ヵ年で一七・六%の増加をみた。一九七〇年の九七五一ポンド(四四二七キログラム)が一九七九年には一一四七一ポンド(五二〇八キログラム)に増加したこと、すなわち、乳牛個体能力の質的向上によって飼養頭数の減少にもかかわらず、牛乳総生産量を維持し、さらに増加を実現したことは、飼養経済の有利な展開であり、先に指摘した経営合理化の実現にほかならない。

表1.　最近の米国乳牛1頭当りの乳量の変化

	乳牛飼養頭数	1頭当り乳量	総乳量
	千頭	ポンド	万ポンド
1970	12,000	9,751	117,007
1971	11,839	10,015	118,566
1972	11,700	10,259	120,025
1973	11,413	10,119	115,491
1974	11,230	10,293	115,586
1975	11,143	10,350	115,334
1976	11,055	10,879	120,269
1977	10,974	11,181	122,698
1978	10,841	11,218	121,609
1979	10,777	11,471	123,623

次に、筆者が見たミシガン州がレスビイグのライス牧場について触れてみよう。

ライス牧場はいわゆる米国における普通の酪農家であり、大規模経営の部類には入らない。搾乳牛五〇頭、飼料畑五〇ヘクタール（全部トウモロコシ栽培＝サイロ用）で、わが国では北海道でみられる経営規模である。

しかし、経営成績は北海道とは問題にならない。年間の牛乳生産量は七〇〇〇〇〇ポンド（三一、七八〇キログラム）一頭当り一四〇〇ポンド（六、三五六キログラム）である。一九七九年の北海道における三〇頭以上規模の成績は一頭当り五、二七〇キログラム（農林水産省畜産物生産費調査報告、昭、五五・一二）であり、このミシガン州の一酪農の経営には未だ道遠しの感が深い。

しかし、米国の農業統計によると、一頭当りの乳量成績ではミシガン州は第八位であり、第一位のワシントン州、第二位のカリフォルニア州には、はるかに及ばない。

因みに表2を見てみよう。

表2によると、一頭当り乳量成績で一位のワシントン州は、一四、六四一ポンド（六、六四七キログラム）二位のカリフォルニア州で一四、四〇八ポンド（六、五四一キログラム）八位のミシガン州は一二、一六六ポンド（五、五三三キログラム）である。前述のミシガン州の酪農家は州の平均より高い成績であったわけである。このように、今日のアメリカにおける酪農経営は、一頭当りの搾乳成績を高め、経営経済のかなめである飼料効率の向上をめざしているのである。これを技術的にみるならば、乳牛個体の能力を高めるという「改良」すなわち家畜育種という面に力

を入れていることを忘れてはならない。

家畜品評会で入賞した牛の写真を額に入れて飾って、誇りにしているのを見て納得がいったのである。

表2. 全米10位の州別1頭当り乳量

順位	州	1頭当り乳量
		ポンド
1	ワシントン	14,641
2	カリフォルニア	14,408
3	ネバタ	13,267
4	アリゾナ	13,127
5	マサチューセッツ	12,511
6	ユタ	12,474
7	コネチカット	12,347
8	ミシガン	12,166
9	ウイスコン	12,107
10	ニュージャージ	12,049
	全米	11,471

以上述べたことによって、ミシガン州の酪農の全米における位置づけが明らかになったのであるが、MICHIGAN AGRICULTUAL STATISTICS 1980 の中にあるMILK PRODUKTS の内容を紹介することにしよう。

乳価は工場渡しで一〇〇ポンド当り一三・二〇ドルである。（一キログラム当り六六円八七銭＝一ドル二三〇円換算）である。一九八〇年における農業現金収入の中、酪農収入の上位は六四七万ドル（一四億八千八〇〇万円）で、ミシガン州農業の上位四位の中に入る。

またミシガン州には六五のミルクプラントがあり、これとの関連産業は、合衆国経済に全面的な貢献をしている。

ミシガン州におけるバター・チーズ・コンデススキンミルク・ドライミルク・アイスクリーム等の生産は、全米の一〇州の一つとしてランクづけられているのである。

以上は、ミシガン州酪農の一面をみたのであるが、一州から、全米の酪農を推測することもある程度は許されると思う。それは、アメリカで私のみたスーパーマーケットはニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルス、サンフランシスコ等の大都会やワシントン州の田舎であるが、乳製品が大量に販売されているのである。飲用乳は、普通牛乳とローファット牛乳等の大中小のパック容器で日本のようにメーカー別に数多くはないが、ヨーグルト、乳酸飲料等は果実の種類によって品名が異なり、数十種を数えるようであった。また多くの家庭で食後のデザートとして消費されるアイスクリームも大中小の容器で数種販売されている。

このようにアメリカにおける牛乳消費は飲用乳以外の消費も大きいということがわかるのである。日本の牛乳生産調整下における酪農の現状にかんがみ、需要と供給のバランスのとれた経済構造について考えさせられた次第である。

農場だより

すべてが絵になる アメリカ東部の酪農

講師　大谷　忠

一九八一年六月に第十四回国際草地会議がアメリカ合衆国ケンタッキー州レキシントンにあるケンタッキー大学で開催された。七年前に第十二回のモスクワ大会に参加したが、その時は、日本からの参加者は七人で大変淋しい思いをしたのに、今大会は四十三名で、今までの最高であり、またアメリカに次ぐ二番目に多い人数で誠ににぎやかであった。これは次回の第十五回大会が日本で開催される可能性があって、ホスト国としてなるべく多くの日本草地研究者が世界会議に慣れておくべきために、日本草地学会が各会員に参加を呼び掛けたからと思われる。しかし私は、モスクワ大会でもそうであったように、会議の前後に行なわれるエクスカーション（視察旅行）が、一般的な観光旅行と違って国をあげてのサービスで、専門的分野をこと細かに見せてくれる企画を期待して参加したのである。

今回も会議中の各専門の研究発表はもちろんのこと、エクスカーションが私にとってアメリカ農業特に普通では見られない様々な酪農形態を詳しく視察することができ、期待通りのすばらしい大会となった。したがって今回はエクスカーションを主にして私の感じたアメリカ東部の酪農の状態をいくつか紹介したいと思う。

ワシントンのダラス空港に着いた私はその周辺を見て、それほど季節感が日本と変わらないものだと感じながら、指定されたホテルに行くと、すでに諸外国の研究者が参集していた。人々に接してみると、自由諸国の研究者が目だち、共産圏からは今回が初めての中国代表団が参加していたものの、ソ連を始め第十二回では多く参加していたチェコ、ハンガリー、ポーランドの姿はみられなかった。

四コースの内、アメリカ東部コースを選んだ七三名（十四ヵ国から）の参加者は二台の大型バス、グレイハンドに乗り、翌早朝から二四〇〇キロメートルの旅がこのワシントンから始まったのである。

最初に視察した農家はバージニア州にある Rokeby Farm で、ここは二〇〇〇ヘクタールの土地を持ち、すばらしく整備された馬房にはサラブレッドの名馬十数頭を飼育しており、その他に乳牛一二〇〇頭、交雑種の肉牛三五〇頭があまり広くない運動場に放飼されていた。狭いところに多くの頭数がいても、日本でよく見られる糞

尿で泥土化し、牛の足が飛節までもぐる状態は全く見られない。また運動場と放牧地には馬も飼育されているためでもあろうが、電気牧柵ではなく木製の白い牧柵が周囲のよく管理された芝生とマッチし、その素晴らしい景観はアメリカ農業の豊さを感じさせる。

翌日は時差ボケと会話の不便さもあってか、少々疲れが残っていたが、予定の時間で行動が開始された。午前中はペンシルバニア州のゲティスバーグにある南北戦争激戦の跡地（Civil War Battle Ground）を見学した後、起伏の多い草地を持ったHarold Gaymere Farmに到着。この農家は家族四人で借地を含めて二六三ヘクタールの畑地を上手に管理し、三四〇頭の乳牛のために大型トレンチサイロ四基を用いて通年サイレージ給与方式で行なっていた。次に視察した農家もそうであったが、アメリカ東部の大部分の牛舎は日本に見られるような近代建築のものではなく、木造によるキング式に似た構造で、壁はモルタルブロック積み、屋根はトタンの全く信じられないようなお粗末な建物ばかりであった。しかしはめ板や屋根は丁寧にペンキが塗られ、風雨に耐えられるよう心がけている。ただミルキングパーラ、大型機械、そして大型スチールサイロなどには多くの金を掛けているようだが、アメリカの酪農家が絵になるのはこれらの大型の建物があるだけではなく、その周囲の広大な芝生を常に美しく刈り込み、自然の環境造りにも精を出しているためと思われる。

旅の中頃にペンシルバニア大学農場に行ったが、乳牛舎にはブラウンスイス、エアーシャー、ジャージ、ガンジー種などが、一区四～五頭で泌乳試験が行なわれていた。また肉牛ではアンガスとヘレホード、緬羊ではサホークなどと数も取りそろえてあり、教育・研究において日本の農学系大学とは掛け離れたこの規模に、私はただ指をくわえて感心するのみであった。他の大学では、国際草地会議の開催校であるケンタッキー大学の農場を見た。キャンパスから農場へ行く途中に、草競馬で世界的に有名なケンタッキー州だけあって、至る所に馬用の放牧地や馬場があり、名馬が続々と生産されているようだが、馬をよく知らない私は、ここが発祥地であるケンタッキーフライドチキンの方が興味があった。さてこの農場の牛と草地を観察したが、牛については見るべきものがなく、草は、一試験圃場が広く、長年の反復を実施しており、また同種混播試験などには興味を持たされ、さらにこの内に、有名な牧草ケンタッキー31フェスクの原種が大切に栽培されているのを見て本当に感激であった。

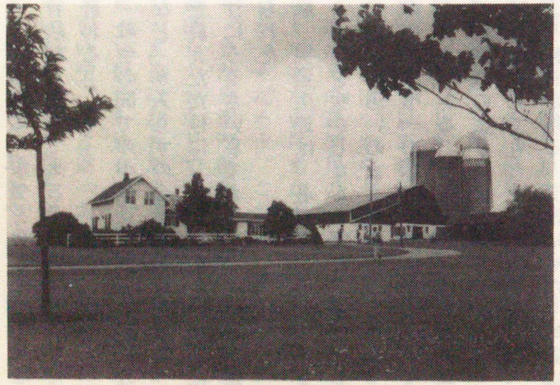
続いて、また農家巡りに話をもどすことにして、ニューヨーク州のある農家は丘の多い土地（Rolling hill）をアンガス一〇〇頭のために放牧地にし、その中には自

然の樹林地や小川があり、牛の健康と労働の省力化に大変都合よく利用した上手な経営が見られたが、ケンタッキー州のジャージー種主体の酪農家は今でも忘れることができない。グリーン色の牛舎の前には広い芝生が夏の日ざしを受けて美しく映え、その中央に一〇〇人以上のピクニックパーティができる木製のテーブルやテニスとバスケットコート そしてプールなどの施設が有って、アメリカの牛飼いの余裕を見せていた。しかしこの程度は他にも多く見てきたので驚きはしなかったが、この農場のすばらしい点はまず牛の能力が高いことである。六〇頭の中で最高泌乳量の牛は三六五日検定で二一、二二一ポンド（約九六〇〇キロ）脂肪率四・四％、ＥＸ九三、次が一八、三七五ポンド（八、三二四キロ）、五・一％、その他七〇〇〇キロ以上のジャージ一〇数頭所有し、その中から何回もオールアメリカン賞を獲得していた。

施設関係では、ミルキングパーラ内の中央通路にはグリーンのジュータンが敷かれ、またエアコンや人間のためのトイレまでが設置されていた。アメリカ酪農は大型だけのものと思っていたのに、このように細かいところまで神経を使う牛飼いがいるのを見て意外な感じがしたのである。

アメリカ東部の、それも一部を見てアメリカの酪農を述べることは誠に恐縮だが、ともかくもアメリカの酪農は、まず広大な面積に、その地に適した牧草を栽培し、生産を向上させて自給飼料体制で牛を飼っている。また湿度が非常に低いことから、多くの良質な乾草やヘイレージなどの生産物調製が容易にできる気象条件でもあるので、安定した経営ができるのである。

したがって、アメリカ酪農は他国に見られない大型の粗放的畜産で経営しているように思われるが、実際は徹底した経済観念を持った経営をしようと努力しているのであって、この努力から生み出された結果が、素晴らしい環境となり、美しい絵になるのであろう。



ニューヨーク州西部にあるHarold Stewart Dairy Farm. 大型のスティーブサイロと木造牛舎

北海道別海町から

出会い

畜産二年　津田新哉

「ボーボー」という汽笛が、私を陶酔の中から現実へと引き戻した。と同時に、連絡船の甲板の上に昇る。まだ、まばゆいばかりの星くずが、空を艶やかに飾っていたが、東の方からだんだんと太陽が、どけと言わんばかりに顔を覗かせようとしていた。前方を眺めると、函館の街の灯が、早く来いと合図をしている。そう、もう目の前には北海道が雄大な姿を横たえていた。

函館港に降り立つ。夏とはいえどまだ肌寒い乾いた空気が、私の回りを取り囲む。目的地である、別海町西春別へと自然に足が踏み出る。上野駅から青森駅に来る時より、北海道へ入ってからの方が長い列車に乗り込み、約11時間後の西春別駅に降り立った第一歩から、私の北海道酪農実習が始まった。

翌日から、うむを言わさず、牛が早く絞ってくれと、霞がかった朝の大草原に声を限りに叫んでいた。まだ、夢の中をさ迷っている私に、寒気を突き破るような奥さんの叱咤が、容赦なく飛んで来る。無我夢中のうちに朝の飼い付けが終わる。

やがて朝食。戦争の間での小休止。実習生、親方、奥さん、子供達など、水入らずの会話をしながら食べる朝食。朝の仕事を終えただけに、すがすがしい気分だ。また、普段みそ汁にうるさい私でさえ、この一杯が驚くほどうまく感じられた。

朝食後の一服。実習生達は、各自くつろいでいる。音楽を聴く者、タバコを吹かしながら寝ころんでいる者、読書をしている者など思いのままである。しかし、私達が、この一日の中での唯一の休み時間に最も恐れていたのは、子供達の介入である。なんといっても成長期にいるので、まるで機関銃のように出て来るゲームを、一生懸命こなさなければ許してもらえないのである。へたをしたら、仕事より疲れが残る。天国にもなり地獄にもなる時である。

昼食後、仕事が始まる。牧柵を直したり、牛舎から放牧場へ通づる道を補強したりする。そしてそのまま夕方の飼い付けに入る。牛を牛舎に入れるため、眼下に広がる大草原の中を「ベーベーベー」と大きな声を出しながら、広く澄みきった青空とどこまでも続いている緑の絨毯の中に挟まれるようにして、地平線を目標に歩いて行く。その時の感覚というものは、言葉で表現しがたいものがある。

やがて搾乳も終わり、着替えて家に戻る頃には、大平原の遠方に大きな太陽が淋しそうに沈みかけている。ふと家の方を見ると、ポツンと小さなあかりを窓の外に投げかけている。一日の仕事が終ったという充実感と安堵感が、やけにそのあかりを恋しがらせる。玄関の戸を開け中に入ると、大きな安らぎが私を取り囲み、顔を錠ばせる。何とも言えない家庭の暖かさがそこにはある。その日一日の仕事の疲れを癒すかのように、酒が心地好く五臓六腑に染み渡る。つい我を忘れて、親方や他の実習生と共に、一升ビン片手に外に跳び出し、大声をはり上げる。誰も聴いていないのに自己紹介をし、私の得意な「知床旅情」を、国後、択捉等、北方領土まで聞こえるほど、どなり上げる。酒に酔っている私には、まばゆいばかりの星くずが、笑っているかのように見えた。そのような事をしでかしたものだから、当然翌日は二日酔いで、仕事が手に付かず、奥さんの寒気を貫く高音の声が、うなりを上げている私の頭にエコーをかける。すると、その姿を見た奥さんは、返すように大きな高い笑い声を上げるものだから、愛想笑いを造り返している私の頭を、さらに襲う。いやはや、たまらなかった……。

数日間を過ごした後、いよいよ北海道酪農の一年のメインイベントの仕事がやって来た。一番草の梱包上げである。地平線が遙か彼方に見える、だだっぴろい牧草畑の草を刈り取り、それを圧縮し、四角い箱状のものにする。それをこんどは、キング式牛舎の二階へ積み上げる作業である。照りつける夏の日ざしに、身体中の水分が、発散させられ、その場に居るだけでも目まいがしそうな中、重さ約18Kgの草の長方体を積み上げるのである。牛舎の二階などは、摂氏約40度以上にも昇り、呼吸をするだけで汗がにじみ出て来る。結局、私達はなんと、合計24町歩の畑から約一万三千個以上の梱包を作り上げ、それを一週間で終わらし、しかも一日に四トン車八往復というそこの牧場初まって以来の新記録を樹立したのである。しかし、その影には、かなりのミステェイクも生じた。ちなみに、私がその運搬用の四トン車を運転した。運転免許を手得していないにもかかわらず、と書けば、だいたいの察しがつくだろう。この他、隣りの農家に手伝いに行ったり、また別海町酪農協同組合主催の実習生交流会、町内盆踊り大会などで、色々な人々と知り会うことができたし、友達になれた人も数人いる。

そのような日々を幾日か通り過ぎ、北海道の夏の煮えたぎった太陽、青い空、透き通った空気、新鮮な緑の牧草、牛の糞や匂いがしっかり染み付いたこの一ヶ月たらずの実習に、ピリオドをうつ時がやって来た。

その日は、親方や他の実習生の配慮により、仕事を休ませてくれたが、帰り支度をしている私の身体を、つい牛舎の方へ向けてしまう。私服のままだったが、ミルクを絞っている他の実習生の所へ行き、今まで気にかかっていた牛の方を指差し「あの牛は、乳房炎になりやすいから気を付けてやってくれよ。」などと、ついロばしってしまう。朝食を済ませ、二階へ上り、支度ができたリュックに頭をもたげ、刻一刻と近づいて来る列車の時刻と自分の時計を照らし合わせるだけで、後は何もできない。この時ほど、時の流れにさからうことができたらと思ったぐらいだ。やがて駅舎に向う車の中で、親方に何か言われるが、返そうとする言葉を口にすることができない。言葉を出せば、自分の感情を抑えることができそうもないような気がしたからだ。車は何も言わず、親方の声だけが心に響く。駅舎に着いて、十分もあった待ち時間が、まるで早や口言葉のように刻んでいる。「俺んとこで、お前は勤まったんだから、これからどんな仕事に就こうともやって行ける。東京へ帰っても、まあガンバレや、そしてこんどの休みには帰って来い。ここは、お前の故郷だからな。」「津田さん、いつでも帰っといで。」親方と奥さんが、私に贈ってくれたこの言葉が、私の心の堤防を破壊したと同時に、列車がホームにすべり込んで来た。ホームの上から、奥さんの手を振る姿が見えるが、どうしてもぼやけてピントが合わない。扉を閉める車掌の笛。最後に深々と頭を下げ、列車に乗り込む。列車が、無情にも遠ざかって行くが、奥さんの手を振っている様子だけが、はっきりとわかる。やがて、想い出をいっぱいつめた私の心と身体が、津軽海峡を渡って行く。水平線の遙か彼方に沈み行く太陽と共に、私の目の前から雄大な北海道が、ゆっくりと消えて行った。そして、私の北海道酪農実習も、幕を下した。

いろいろな人達が、それぞれの人生を歩く。そして、その人生を歩んでいる途中には、いろんな人達と巡り会うことだろう。その巡り会う数だけ、別れがあるかもしれない。が、しかし、人と人とがこの世の中で接する歓び、嬉しさを、今一度見つめ直して欲しい。この実習で、学校における授業では学ぶことのできない、何か仄かな暖かいものを感じたような気がするのである。私は、この随筆を読んでくれる人達に、このような人間もいることを理解してもらいたく、ペンを走らせた次第である。

べコの唄

北海道別海町西春別佐藤牧場
佐藤徳男

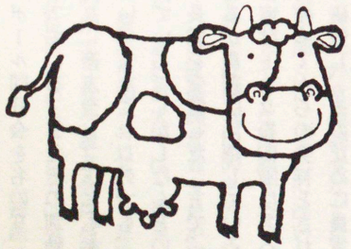
一、うちの宝は畑とべコよ
　堆肥鋤き込む凶作なしよ
　いつもニコニコ明るい供出
　こんな百姓はやめられぬ　ドコズンドコ

二、堆肥と緑肥の輪作経営
　草も生えない手間をもはぶく
　地力増進本も読めるよ
　酪農経営やめられぬ　ドコズンドコ

三、明るい唄でお乳を搾りゃ
　べコはあまえてホホを寄せる
　うんと搾って集乳所へ出せば
　毎月入るは牛乳代　ドコズンドコ

四、嫁を貰おうか婿取りなしょうか
　うちの畑を見てくれみなさん
　いつもニコニコ文化な生活
　望む花嫁惚れてくる　ドコズンドコ

五、腰は曲がれど楽しい毎日
　べコに引かれて善行寺参り
　南無阿弥陀仏と極楽ゆけるよ
　べコよありがとう背をさする　ドコズンドコ



サークルレポート

農友会農村調査部の今日における位置

農友会農村調査部

農大には今や少なくなったとはいえ、農業について考える農業クラブが割と多く存在している。しかし、その中では農友会を名のる団体は少なく、農友会では畜産を対称としたものはないに等しい。こんな状態で唯一畜産問題をテーマに上げる可能性を秘めているのが、我々農友会農村調査部である。(以後農調とする。)農調は長い間農学や農経の人間たちに、その中核をにぎられ、畜産の出る間はなかった。しかし、やっと昨々年あたりから畜産部員が増えはじめ、現在では部の重要ポストにつき勉強会のテーマも畜産問題をとりあつかうのが多くなり、年間調査テーマも畜産になる可能性がでてきた。ではここで、農調とはいったいどういう団体なのか、それを紹介してみる。

農調という団体の中実は、長い間畜産ではナゾとされ、その正体は誰も知らず、部員も変なのが多い。ただ知られていることは、ソフトボールが強く、農大の数多いソフトボール大会で何度も優勝していることで、ある方面ではソフトボール同好会を名のり、一方では農調インケンズを名のっている。またその別動隊は、明大に遠征試合に行ったり、畜友会ソフトにも参加し、活躍したこともあるらしい。またこれ以外でも、音夕の舞台係を務めるなどをしている。しかしなんといっても有名なのが、収穫祭で学長賞を受賞したことで、このように多方面に地道ではあるが農調は活躍しているのである。

農調の部室はトキワ松四階にある。農調はもともと農業経済学科のゼミからの発祥とされ、その目的は農業問題を幅広く研究し、そのために農家の人々と共に生活し、実習し、その問題を追求していくという農業経済学科でいかにもやりそうなことを行なう団体である。活動は年に一つテーマを決め、それにもとづく予備調査で、全員が全国に散り調査地候補をさがし、その結果を集計して、春季合宿で選考し、決定する。春季合宿は富士農場で行なわれ、炊飯器のない農場では飯を薪で炊いたり、雪の中でソフトボールをしたり割と楽しいものである。その後、新歓を経て、勉強会や、調査票、アンケートの作成などの仕事をやり、いよいよ夏期休暇には調査実習をやる。この実習期間は割と短かいものの、昼間は農作業に励みへとへとになるまで働き、夜は実習先の農家のみならず、いくつもの農家をもまわり、農家の主人に直接会って質問をし、話を聞くというもので、昼間の仕事で体がつかれているからとてもきつく感じる。また、一口に調査といってもむずかしいもので、言葉がよくわからなかったり、農家の人にいやがられたり、また、目的の農家がみつからなかったり、苦労は絶えない。また、部員は調査実習以外にもほとんどの者が実習に出かけ、休暇期間中はほとんど地方の農家に居る。畜産の部員も同様で、現在5人であるが全員が北海道酪農地獄を経験し、その他、野菜、果実、などの畜産だけでないいろいろな農業実習を体験し、いろいろな農業を肌で感じるように努めているのである。

夏休み後、調査結果を集計、それの結果から今度は考察し、調査の結果からどういうことが考えられるかを討議する。この期間が我々の部のいちばんいそがしい時で、収穫祭まで気をぬくことはできない。せっかく苦労して考察をだしても上級生から、これはおかしいだとかクレームをつけられ、また一からやり直す。このようなことのくり返しで、結局徹夜したり、頭も体もとてもつかれる。このようにして結論が出た後は調査結果の作成で、この一年間の総結集がこの結果書の中に入いるのである。そして収穫祭準備へ、収穫祭が我々の部の唯一の発表の場であって、この一年間はすべてこのためにあったといえる。81年の収穫祭ではその苦労が実ってみごとに学長賞を受賞した。

また、12月には現地報告会を調査地の農協などで開き収穫祭での発表を今度は実際に農家の人に聞いてもらう。これが我々農調の一年間の活動である。まあ簡単に言えばテーマを決めて、それを調査し、発表するということである。

このように農調は他の農業サークルに比べれば、実習も少ないし、畜産もあつかわない、どちらかといえば、机の上の勉強が多く、農経的であるが、しかし、そこには農民の考えや、心を知ろうという情熱があるように自分は感じる。農民の意識調査などをしながら農家の主人から色々な話を聞くが、そこにはいつも農家の悲痛な訴えもあるし、楽しそうな笑顔もあり、農民の心を強く感じる。それを我々は真剣に聞き入り、何もできない自分に気がつく、これは農調部員全員が感じていることではないだろうか。最近農大では、農業に対する意識もうすれているが、農家を知ろうという意識もない。こういう農大の風潮の中で、我々農友会農村調査部は地道ではあるが、大事な位置にあると自分は考える。

(畜産二年　川岸　裕二)

詩・随筆

畜友会に思う

一年　小室　藤華

一年間畜友会にいて、今振りかえってみると、畜友会は結局どういうところだったのかわからない……というのが私の実感です。学内スポーツ大会、ソフトボール大会、収穫祭の時、またその後のハメをはずして騒ぐ慰労会があったかと思えば、家畜人工授精の講演会、酪農実習の斡旋もあったり、切り換えの難しいところではあるようです。

畜友会に入って、学科内のことをいろいろ知りました。研究室や先生、テストの出題傾向。サークルやクラブに入っていないと、同じ学科の先輩に接することのできる機会というのはごく少なくなります。クラスの友だちとだけではわからないことがたくさん出てくると思います。しかもわからないことだらけの新入生、友だちもわずかでした。畜友会の仕事を通して友だちもでき、人との輪が広がったと思います。

畜友会は、学科内のいろいろな行事を企画し、運営していきます。収穫祭には統一本部の母体となって基礎固めをしていきます。

それらの運営のために、公文書を書いたり定例会を開いたりするのに使っているのが、常盤松５Ｆの畜産学科室です。この部屋には何であっても、他の学科の部屋と比べて、やはり伝統の重さを感じさせます。ここへは、仕事をしに……というより、お昼のパンを食べに、ノートを写す場所に使っていたような気がします。それだけ気軽に入れるということでしょうか。床にはお酒の匂いがしみついていることもあったり、衣類が山になっていたりすることもあるのですが、畜友会の人でなくてもくつろいでいけるところだと思います。その気さくな雰囲気が収穫祭での盛り上がりに景気をつけていると思います。

振り向いてみたら

二年　松尾　由紀子

大学生と名乗るようになってから二年もたってしまったなんて、嘘みたい。「あっ」と言う間はあったけど、「あれよあれよ」と思う間はなかった感じ。残る二年はもっと早く、駆け足で過ぎて行くんだろうナ…。

さぁて、この二年間で何か得たものはあったかなぁ？まず、休み時間ごとに、あんまんを食べるほどの食慾。休み時間に、あんまんを頬ばって、大笑いしている一団が私達です。ご一緒にいかが？

それから、井の頭線と小田急線の定期。初めて手にした時、高校時代の中央線の定期に比べて、何てきれいなんだろう！とくだらない事に感激したのでした。急行が吉祥寺を通過しないというのも気分が良い。何を隠そう吉祥寺は出発点だから、急行でも何でも止まらない訳にいかないのですよ。

おっと、忘れてならない一番大切なもの。とっても素晴らしい友達が多勢。畜産学科は勿論、他の学科やサークル、先輩などなど。農大ならではの素朴さ、暖かさ、優しさいっぱいの人達に囲まれて、学校はまさに天国！

「一年生になったら、友達百人できるかな…」なんて不安げな歌もあったけど、おかげ様で、五月病も登校拒否も知らずに今に至っております。何分、根が内気なものですから、存在感が薄いかとも思いますが、私にお気づきになりましたら、是非ひと声おかけくださいませ。

他には、本人の希望を無視して二つも齢をとったおかげで、ずうずうしさを少々。残る大学生活で、最低二つオバンになる予定だから、ますます磨きがかかるのは保証つき。中年のおばさんみたいにはなりたくないなぁ。ぜい肉をたくさん。これは多分あんまん公害の影響ね。今にも脳みそから飛び出して行っちゃいそうな程元気がいい、ほんの少しの専門知識。厚木の実習に耐えるだけの体力・気力もそれなりに身についたみたいです。一年の時のように泊まり込んでの実習にもう一度行ってみたいなんて思っているのは、私だけかなぁ。もっとも、あの実習の魅力は、消燈後なのだけど。

残るは、素適な彼ちゃま。卒業までには、是非…ネ！

今までのが、身についたもの。こんなに沢山、身につけたおかげで、すっかりＢＯＯになっちゃった。皆さんは、私みたいにならないように十分お気をつけくださいネ。

それでは、反対に二年間で失ったものは？

若さ。精神的な面においては、自他ともに認める最高級の若さを誇っている私ですが、肉体的な面において。

ちょっとばかり体育でからだを動かすと、次の日しっかり筋肉痛。などということもあったっけ。中学、高校時代のように走ったり、泳いだり、（ボール音痴のため、球技はパスさせていただきます）何かやりたいとは思っているのですが、暇がないというのが実状。睡眠時間が八時間は欲しい私には、一日が二十四時間というのは短かくて…。笑ったな。寝不足に弱いのはAB型の特徴なのですゾ。今年で体育も終わっちゃったし、これでは老化の一途をたどるばかりなり。駅までのダッシュだけではダメかしら。何か対策を考えなくてはいけないなぁ。

寒さにも益々弱くなったのも、齢のせいかな。最近、寒さに対する抵抗性を回復するべく、服装の改善に務めているのに気づいていただけていますでしょうか？

二年目には、『恥じらい』というものを忘れてしまうのが、畜産学科に入学した者の定めだっていうのは本当なのでしょうか？自分では、まだ完全に忘れてしまったとは思っていないけど。時々、ど忘れするぐらいのものですョ。でも、この一瞬がどんなに恐ろしいか、経験のある方はおわかりでしょう。一般的な女の子では絶対に言えないような単語がポロッと口から出てきた時の恥ずかしさ…。穴を掘ってでも、入ってしまいたいぐらい。昔の純情さは、どこへやら。このまま、症状が悪化した場合、果たして普通の人間として社会に出られるのかしら？でも、随分畜産に染まってしまったみたいだから、今のところ、治療は不可能との診断結果、あーあ。そういえば、巷では「何とかの畜産」と言われているらしいですが、ご存じでしたか？でも、このまま強く生きてゆけば良いのです。正義は必ず勝つ！んだもの。

これは、昔からなかったものですから、失った訳ではないのですけれど、実は、私はまだ九十分の長い授業をまじめに聴くだけの集中力が身についていないのです。一般教養ともなると、三十分もたてば飽きてきて、他の本を読んだり、ノートにいたずら書きをしたり、寝ちゃったり。ひとりで静かに遊んでいればまだ良い方なのですよね。付近一帯の人に話しかけたり、ノートをのぞきこんでみたり、大変ご迷惑をおかけしております。ごめんなさい。

そこで、私は集中力を養う術をお教え願いたいと思っているのですが、どなたか知ってる方いらっしゃいますでしょうか？

ここ数年、大掃除をしていないので埃まみれになった記憶は、これだけ探すのがやっとでした。現在のこと、将来のことを考えるのは、とても大切だし楽しいものです。過去のことを思い出してばかりでは老人ぽいけど、たまには振り向いてみるのも良いのではないですか？

こんな文章を最後まで読んでくださって、どうもありがとうございました。表彰状もんの忍耐力に拍手！

ぼくらは生れ変った木の葉のように

柄本大学

「昨日なんて信じられないよ
　信じられるのは明日来るネコさ」

それが僕には信じられなかった5月は
僕は一匹の淋しいネコだった気がする

「ギンズパークはウソつきの小ネコだ
死ぬ者はいても生れ変る者はいやしない」

たしかに彼女はお母さんになって
リボンをむすぶことを忘れてしまった

「新しいギリシャなんてありやしない
あるのは汚れた空だけだ」

僕が今より若くて、まだ彼女を知らなかった頃
空はいつでもぬけるように青かった

でも、泣いたのだろうか
泣かなかったんだろうか
生まれてきた子供のために
そう、たとえ10月の弱き風にも似たか
小さな言葉でも、決して消える事のない
淋しさが僕をネコに変えてしまう
それはきっと・・・・・

「ぼくらは生まれ変わった木の葉のように
　新しいギリシャへでかけよう」

淋しいおさかな

淋しいおさかなさんは
世界で一番小さな海に住んでいるんです

だって星も淋しくて眠れない夜には
なみだがポロポロこぼれてくるでしょう
その一粒をそっとほぐしてごらんなさい。
忘れたはずの麦わら帽子が
白い浜辺にころがってるのが見えるから・・・・・

ねえ、世界で一番小さな海って
なみだなんだね。

我が町　〜生実町〜

二年　五十嵐　勝　芳

生実町は千葉市のはずれ――ちょうどそんな所に位置しています。少し歩けば外房線に出くわすし、耳を澄ますと内房線の音が聞こえます。

生実町は生実と書いて〝おゆみ〟と読む。別にむづかしい字でもないのにみんな読めない。だから、そういうやつはすべて馬鹿にしてやる。と、なると畜産の連中はほとんどがバカになる。僕は空しさにかられた時、時々こういうことをして優越感に浸る。が、いつもその対象となっているのが同年代の畜友会の人間であるのが自慢にならないのである。今度からもっと程度の高い連中と付き合うことにしよう。町内には生浜中という中学があるが、これもよそへ出てしまうと〝なまはま〟なんて言われてしまう。僕はそんな境遇にも遭っているのだ。それで是非ともこの〝生浜〟を読んでもらいたい。自分の住んでる所なので少しくらい地名度を高めたいものだ。

さて、話が少しずれてしまったけど、僕の家から数十M行った所に、全く無名の生実城跡がある。昔は小弓と言ってたらしいが、テレビで見るような華やかさは少しも感じられない。ただ門前に藩主森川氏の墓が大きく聳えているだけである。墓前から続く石畳もなんとなく殺風景で落ち着かない。奥には昔ならではの刀などが置いてあるお堂があるが、そこも十年前くらいに火事で焼失して今では興ざめの心地である。城跡の前には釣りキチが集まる通称弁天池がある。ここでは錦鯉・口細・鮒などが釣れ、朝早くから白銀の糸を垂れているが、たまに真赤チンがニョキっと喰い付いてくるのには参る。あの異様な体つきは最近どうも苦手である。

城跡を向いにして右手の坂を登ると、生実神社がある。少し手前に近代的ガソリンスタンドが出来てしまったので、なんとなく雰囲気が乗らないが、それでも新年と年に一度ある町内の祭りの時は人でいっぱいになる。祭りといってもそんなに盛大ではないが、屋台もあるし、千葉テレビも放映してるし、日本コロンビアの売れない歌手も来てるし、酒の勢いで盛り上がってるみたい。僕は僕で地元の女の子といい調子になっているが、いかんせん顔見知りばかりなので、後で話を聞くと友達の妹だったなんて、一瞬ギクリとするようなこともある。そんな神社もにぎやかなのはそれだけで、後は子供が隠れんぼに使うだけだ。僕も幼い頃はよくやったものだが、こえだめに片足を突っ込んだ経験があるので苦笑いだ。

隣町の大巌寺町には名前の通り大巌寺というお寺があ

る。ここは除夜の鐘を町民が鳴らすので紅白が終わると、友達とすっ飛んで行くのだが、今年は残念にも順番に遅れをとり、その上ドブに落ちるというみじめな結果を得てしまった。そばにいた見知らぬ女の子は大声で笑うし、友達は知らん顔するし、本当に困った。

気が付くと、自分は総武快速線の電車の四角いボックスに堂々と足を伸ばしていた。眠い。が、千葉は、生実はもうすぐそこです。みんなも一度、暇と金があったら栄町見学のついでに寄ってみて下さい。お待ちしてます。

〔交通の便〕車の方＝首都高速から湾岸道路か京葉道路で千葉まで。千葉から先、産業道路か末広町通りで約二十分。ここから木更津まで三十分。大網まで二十分位。

国鉄の方＝総武線・快速線で千葉駅、又は蘇我駅下車。小湊鉄道バス農業センター・北生実・明徳学園・落井椎名小行で柏崎下車。

尚、農大から直接お越しの方は、片道八百九十円でご安全な旅が営めます。

生に

二年　加藤　章

生に、俺たちは生きている。
何かをやるためにだ。
でもその何かが、まるで深い霧の中で
動めく巨大なふわふわした生命の様に
つかんでも、つかんでも、指のすき間から
フッと逃げてしまう。
追っても、追ってもまるで夢の中での
果てしない探偵ごっこのように。

見える理由のない未来の為に
酔いごこちだった過去をひきずって

「若い時は」などと言って逃げ出す前に
自分の心に素直になって、精一杯生きて
たとえ、その日暮らしの生活でも
とにかく一日を、一分を、一秒を。
自分の力がわかるまで
その宿命に従って・・・・。

「なぜか　埼玉」

二年　江　袋　利　幸

なぜか　知らねど　～とはじまる、さいたまんぞうの「なぜか　埼玉」は昨年の静かなヒット曲であるので皆さんも周知のところだろうと思う。この歌がヒットしたように埼玉という町は、その地名だけでなんとなくギャグになってしまう、そんな県である。それは大都市、東京のすぐ北にありながら、東京のような原宿、六本木、あるいは赤坂、又は神奈川のように横浜、湘南等といったヤングの集まる町もなく、パルコ等のデパートも皆無に等しく、あるのは地方都市にのみはびこるダイエー、西友などといったマイナーなおば様族の井戸端会議所的なところばかりなので、そのナンセンス的意識が原因になっていると考えられる。しかしながらその埼玉も年々東京のベットタウンの中核を成すようになってきた。特に、東武東上線、京浜東北線、西武線沿線は朝夕、東京へ通勤、通学する人で大混雑している。そして今年の六月には大宮駅を起点とする東北新幹線が暫定開業する。これに伴って、新幹線停車駅の周辺はしだいに大都市化されるであろう。大都市化も結構であるが、その反面、自然がどんどん破壊されていることも、まげられない事実である。私の住んでいる朝霞市も二、三年前までは田んぼ、畑、そして林に囲まれた、そんな市であったが、ここ数年、都市化が進み、それらが、空地となって、自然のないただ人ばかり目立つ、そんな市に変わろうとしている。埼玉には、秩父の山々やその中に息吹いている大いなる自然や、その麓にある森林公園や動物園、又は秩父の山々から流れ出ている清き川がある。それらを破壊せず、我々人間が共存していける方法はあるはずである。たしかに世の中は高度化、あるいは高速化している。しかしながら、清き大自然を破壊してまでも、高度化あるいは高速化しても、はたしてそんなに大きなメリットがあるであろうか。たとえ、超高層住宅に住んでいるから、又は新幹線にのったからといって一生の喜びを得るとは思えない。人間の心はそんなに流動的かつ単純ではないはずである。したがって私はナンセンスな埼玉でも田舎的都市でもいい。自然と人間とが共存しているような、そんな県でいつまでもあってほしいと願っている。

私の故郷

二年　阿　住　進

コンクリートジャングルと、人は呼びます、ネオン、ゴミ、スモッグ等々、東京のイメージとはおおかたそんなものばかり、街は人であふれ、みうごきがとれない状態になっています。

ある人は、ロンドンを、老いた巨象が自らの死期をさとったように、静かに衰弱していくのを待っているようなおだやかさがあり、ニューヨークは、とげとげしさ、暴力性そしてやけくそなエネルギーを持った街、そして東京は、ひたすら肥大し異常なエネルギーを発散していると、まさにその通りなのかも・・・・

私は北海道が大好きです、なんといってもあの雄大さが最大の魅力です。夏は緑一色におおわれ、広大な大地に吸いこまれていく夕日は、一種のやすらぎと明日への活力を与えてくれます。冬の北海道の寒さはきびしくつらいけれど、大雪原にのぼる朝日は一種の緊張感を与えてくれる、とにかくおおらかで、あれほどの包容力を持った土地もないだろうと思います。

それなのに東京という街は私に一種のやすらぎを与えてくれます。ドブ川の臭いや、車の音、その他すべてが、たいへんやさしく感じられる時があります。そんな東京に私は愛着心を持てます。

人は盲目になってしまった

ペッカー

恋をし、自己をうしなってしまった時、季節の変わりめもわからなくなってしまった時、人は盲目になってしまう、そんな時自分の足元をたしかめて、一休みしてみるのもいい、又、ちがった自分が見えるかもしれない、そして歩きだそう、それも自由なのだから、ある人が与えられすぎた自由と自由について言っている、たしかにそうなのかもしれない、自由を与えられすぎた為、私達は盲目になってしまったのかもしれない、そうだとしたら、一休みして、もう一度足元をたしかめて、歩きだそう、自分をあわれんだり、するような自分にならない為に。

我故郷（名古屋）

二年　小澤真也

一九八一年は、我故郷にとって大変な年であった。国際都市になりたいばっかりに、オリンピックなんかに立候補し、ソウルに負け見事落選。それに輪をかけてあのタモリ氏が大々的に名古屋市、名古屋弁をバカにしてたもんだから、「出身地は？」と聞かれて「名古屋」と答えると失笑が返ってくる。大好物はエビフライと決められてしまう（本当に好きだけど）で大変だった。

しかし、しかし名古屋は偉大であった。花の東京に数々の芸能人を送り出しているのだ。かって花嫁候補No.1になった竹下景子。脱いでしまったが清純な桂木文。「完全無欠のロックンローラー」のアラジン。一曲しか売れなかったけど雅夢。全々売れないけど鹿取洋子。やっと「まちぶせ」で売れた石川ひとみ。映画「なんとなくクリスタル」のかとうかずこ。最近伊丹サチオと共に脚光をあびているあいざき進也。「高校三年生」の船木一夫。あの横井庄一だってそうなんだぜ。

BIGスターは、いないけどすごいでしょう。昔の話恐縮だけど、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康もそうなんだ。ああ徳川家康が都を江戸に移さなければ名古屋が主都だったのに。

しかし、名古屋は人材豊富、ことばもきれいだし、いい町だな。

「師」と思う心

一寸法師

「師」、これほど学生にとってすばらしいものはないはずである。

学生諸君、一生に一度でもいいから心から、この人が私の「師」だ、と言えたことがあったかね。

現在、学生が「師」と考える内なる心はどのように変かったか、多分、昔から変化はしていないと考える。

さっするに、近年「師」となるべく人間の人格、学識等の薄さが理解できよう。

やはり、「師」とあるべき人々は、再度、我をふりかえってじっくりと考え直してみては、いかがかな……。

我の故郷 —福山市

二年　臂吉浩

福山市は、広島県と岡山県の県境にあります。だから広島と岡山の両方の文化圏に属しています。早い話が、「もみじ饅頭」も「吉備団子」もあるということです。

東京から新幹線でちょうど5時間、駅に降り立つと正面には、久松城と呼ばれる福山城が聳えています。このお城により、福山は、江戸時代初期から、譜代水野家の城下町として栄えました。後に阿部家に代りましたが、幕末には開国を行なった老中阿部正宏が城主でした。

今でこそ福山は製鉄の盛んな街として知られるようになりましたが、それは今から約15年くらい前に日本鋼管福山製鉄所ができてからの話しです。製鉄所は創業して以来、埋め立ててはは工場を広げるという繰り返しで、一日の鉄の生産量が世界一多いという製鉄所になりました。それ以前は、琴の街、下駄の街でした。この二つはどちらも全国の生産量の8～9割を占めています。その他には、久留米・伊予と共に三大絣といわれる備後絣、たたみ表に使うい草などの栽培が盛んです。

地図で見ればわかるように、福山は瀬戸内海に面しています。海の幸も豊富です。市の南端の鞆町は歴史的に重要な所だったようです。足利尊氏が建てた安国寺、山中鹿之介の首塚や明治維新の動乱期の三条実美らの七郷が京から長州へ都落ちした時立ち寄ったという遺跡などがあります。潮待ち港鞆の浦として栄えたそうです。今は、ひなびた漁村という感じですが、5月に観光行事として鯛網を行なっています。

その他、市西部の松永町には日本でも珍らしい〝はきもの博物館〟という建物があります。松永町は前に書いたように日本一の下駄の産地なのでそれにちなんで建てられたようです。展示品には王選手のスパイクをはじめ世界各国の珍らしい靴やはきものが並んでいるそうです。

市内の名所旧跡は、福山城の他ばら公園と明王院があります。ばら公園には市の花であるばらの花が公園内に約4千本植えてあるそうです。5月10月にはそれらが咲きほこってその華麗さは目を見張るものがあります。明王院は、弘法大師の開基と伝えられる古刹で、本堂は鎌倉時代の建立で、和様と唐様の折衷様式の日本最古のものと言われています。

研究室だより

昭和五十六年度
畜産学科
卒論題目

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝・育種学、特に血清学的、細胞遺伝学的、分子遺伝学的な見地から、広範囲にわたり研究活動が実施されております。

当研究室では室長の鈴木正三教授をはじめ田中一栄教授、天野卓講師、島岡達郎副手を中心に、大学院生四名、学部学生四八名で構成されており、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれ目標に向って頑張っております。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や毎週行われているセミナーのほか、卒論等の研究・実験における問題点を解決する為に、昼夜を問わず熱心に討論されております。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究のため海外に出張されたり、また学生も海外調査や他大学および他研究機関に出向いて研究を行っております。

研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会ならびに特別講演会、収穫祭への参加（文化展・模擬店）、研修旅行（五六年度は家畜改良事業団の種雄牛センターおよび群馬県畜産試験場の見学）、卒業論文発表会などがあります。

因みに昭和五十六年度の卒業論文題目は次の通りです。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
23	岩本　真一	但馬牛の改良上の近交度に関する研究	鈴木
29	内野　裕一	イノシシの頭骨に関する研究、特に下顎骨の形態について	田中
31	王　定国	馬唾液蛋白における電気泳動変異	天野
37	大西　彰	等電点電気泳動による山羊血液蛋白の遺伝的変異の検出	天野
49	柏木　昭良	豚の産肉能力に関する統計遺伝学的研究、特に神奈川県における4品種について	田中
52	加藤　新悦	分染法による豚体細胞染色体の核型分析	田中
74	斉藤　睦明	青森県における軽種馬生産体系と優良馬の血統について	鈴木
77	坂田　勲	分染法による山羊の染色体分析	田中
81	佐藤　幸男	日本産イノシシの遺伝的諸形質に関する検討	田中

89	杉尾　秀樹	グラジェントゲル電気泳動法による豚血液タンパク型の検出	田中
99	左右田竜寛	血液蛋白型から見たインドネシア在来牛とホルスタイン種の遺伝的差異	天野
103	田川　修	豚の赤血球酵素型の遺伝的変異に関する研究	田中
105	武　美徳	実験動物としてのマーモセットに関する形態学的研究	鈴木
130	中村　敦子	日本在来馬の渡来経路について	鈴木
140	長谷川一郎	ウナギの血球酵素の多型に関する研究	田中
146	羽山奈保子	緬羊血液中のMalic enzymeおよびPost albuminについて	田中
147	原口　俊彦	馬尿蛋白の多型に関する研究	天野
154	福田　憲正	和牛集団の血液型遺伝子構成の分析	天野
156	福元　千昭	鹿児島県における黒毛和種の産肉能力に関する研究	鈴木
166	前原　昭則	サラブレッド種の発育に関する形態学的分析	天野
176	三宅　清	電気泳動による牛血液蛋白の遺伝的変異の検出	天野
187	山崎　悦子	マウス胚の培養における発生能の系統差	田中 石島
192	吉澤　由美	等電点電気泳動法による馬血液蛋白の多型に関する研究	鈴木
207	横川　正	水牛血液蛋白の多型に関する研究	天野
210	北瓜　活鋭	乳蛋白質の多型に関する研究	天野
219	中川　幸良	山羊の血球型に関する研究	鈴木 天野

家畜衛生学研究室

本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師、鈴鹿茂美研究生各先生の御指導のもとに、四年生二十三名、三年生二十一名、二年生二名、一年生一名、聴講生一名が一体となって活発なる研究室活動を行っている。

研究活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び、糞尿処理など家畜衛生（家畜、家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜、家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが、主な目的である。）の立場から独自に追求している。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活

動が行なわれている。

その他研究室の主な行事として、新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加（文化展、模擬店）、親睦旅行、送別会、定例会、ゼミナールなどがある。

本研究室の大きな特色として、室員各自が室員としての自覚と責任を持ち、一人一人がその運営に大きく貢献していることである。

このように、多面活動において学生生活の充実を計り、各自の個性を引き出し、それを持ちより研究室独自の個性を創造するということに目標を置いている。

十二月には新役員が決まり、明るく個性的な室員はますますはりきっている。

卒業論文題目

1	相川 博宣	薬物中毒の症候に関する研究	近江 渡辺
10	池谷 正昭	殺鼠剤について	近江 渡辺
11	石井 誠志	豚舎内飛来衛生害虫の分類とその出現時間について	近江 渡辺
21	岩田 仁	神奈川県清川村における肝蛭の感染状況並びに中間宿主の分布状況について	近江 渡辺
28	内田 賢二	ペットショップにおける健康阻害子とその衛生対策について	近江 渡辺
43	小椋 勇人	ペントバルビタール製剤の反復投与が家兎の一般臨床所見並びに血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
47	柿木 照也	家兎のアロキサン糖尿病に対するグリベンクラミド製剤の応用	近江 渡辺
51	加藤 智志	副腎皮質ホルモン過剰投与が犬の血液並びに尿性状に及ぼす影響	近江 渡辺
55	苅草 洋雄	北海道遠軽町近郊における畜舎内飛来衛生害虫の分類について	近江 渡辺
57	河野 敦夫	砒素剤投与犬の血液性状並びに肝臓の組織学的観察	近江 渡辺
60	菊地 春子	公園内排池犬糞の内部寄生虫について	近江 渡辺
69	小林 大介	抗生物質投与における鶏腸内細菌の変動に関する研究 特に嫌気性菌について	渡辺 近江
78	佐藤 朱実	酸酵飼料給与豚における内部臓器の組織学的観察	近江 鈴木（伸）
83	篠塚 賢次	アロキサン糖尿病、蔗糖過剰投与犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江 渡辺
84	柴田英一郎	発癌物質MNNG投与ラットの血液性状並びに組織学的所見	近江 渡辺
93	鈴木 隆俊	リボフラビン（Vitamin B_2）欠乏が鶏の血液性状に及ぼす影響	渡辺 近江
98	仙波 行博	神奈川県高座郡寒川町近郊における酪農の衛生対策について	近江 渡辺
101	高橋 誠司	運動場内排泄豚糞の内部寄生虫について	近江 鈴木（伸）
107	竹村 次朗	東京都三多摩地区における酪農の衛生対策について	近江 渡辺
132	成沢 滋美	抗生物質投与が山羊のルーメン内繊毛虫に及ぼす影響について	近江 渡辺
133	根岸 彰	宮城県古川市近郊における酪農の衛生対策について	近江
137	萩野 朋美	豚ジラミの生態に関する研究 産卵部位について	近江 鈴木（伸）
175	宮内 直也	豚の発情鑑定に関する研究 電気伝導度計の応用	近江 鈴木（伸）
180	向山 正彦	抗生物質投与が山羊の一般臨床所見並びに血液状に及ぼす影響について	近江 渡辺
193	渡辺 薫	子牛の下痢に対する治療法の検討	近江 荻原
202	金沢 敦	馬内部寄生虫に対する糞便内虫卵検査法の検討	近江 渡辺
213	野村 友宏	消毒用薬剤の気化吸入が家兎の一般臨床所見並びに血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
216	細貝 昇	ブタジラミ Haematopinus suis Linne 胚子発生に関する研究	近江 後閑
		牛内部寄生虫の発育環に関する研究 産卵について	近江 渡辺

畜産経営学研究室

畜産経営学研究室は、昭和三十五年砂川泰夫先生が創設され、開室二十二年になる。現在、砂川先生の意を受け吉村喜彦教授、桜井博文講師、石岡宏司助手、諸先生の元に学生（三年二十四名、四年二十二名）が研究活動を行なっている。

当研究室は、学科内の他の研究室とは違い「畜産」というものを経済学的側面から、導き出そうとするものである。そのために、酪農班、肉牛班、養鶏班、養豚班の4班に、経営形態から別4、各方面からゼミ活動を行なっている。さらに、それらを総合した週一回の全体ゼミを行い、又、原書経済学ゼミ等も行なっている。日常の活動は以上であるが、春、冬の研修旅行、収穫祭参加、畜友会ソフトボール大会参加など室員相互の親睦も、他の研究室以上に深められている。

卒業後、毎年五名～十名が自営を行うことから、畜産経営学が、畜産を実際に行う際の低辺になるものだと考えられる。卒業後もこうしたことから、OBで「一歩会」を作り、卒業後も相互に連絡を取り合っている。

研究室の当面の目標は、与えられる研究ではなく、自ら行う研究に近づけることである。自分から行う研究こそ、本当の研究室であると考える。

卒業論文題目

6 飯田 祐司 食肉生産における給与飼料の史的展開 吉村
16 市川 直昭 群馬県における養鶏の現状と展望 特に前橋地区について 吉村
18 井上 丈士 戦後日本における農民運動の展開 農経 大橋
22 岩本 和也 児湯地区における養鶏の実態と展望 吉村
39 大林 宏彰 石垣島における肉牛経営について 吉村
40 大類 慎二 沖縄県八重山における肉牛飼養の特異性について 吉村
45 小野 等 損益分岐点からみた肉牛経営の安定規模について 吉村
67 黒田 亮一 秩父地区における養豚経営の収益性について 吉村
97 瀬崎 忠雄 宮崎県西諸地区における和牛の価格形成について 吉村
113 田村 浩之 三重県における養鶏の現状と展望について 吉村
123 徳重 雅夫 損益分岐点からみた酪農経営の安定規模について 吉村
143 羽場 茂宏 肥育期における乳用雄牛の飼養標準と飼料経済 吉村
144 馬場 哲也 北海道宮北牧場の経営分析 吉村
82 佐野真一郎 カルフォルニア州におけるフィールドロッド経営の現状と展望 桜井 守正
94 鈴木正世志 乳雄肥育経営における素牛導入の問題点 桜井 守正
136 野島 忠 熊本県球磨地方における和牛経営の実態と展望 桜井 守正
157 藤井 慎二 オーストラリアにおける牛肉生産と輸出 桜井 守正
170 松本 末広 フン尿処理問題の対策について 桜井 守正
177 宮田 透 岩手県の酪農における県体制運動の成果と課題 桜井 守正
189 山田 勝大 乳オス肥育農家の経営規模別の収益性の比較 桜井 守正
201 渡部 英彦 自給粗飼料の生産と経営の収益性、安定性との関係 桜井 守正
208 斉藤 憲 Thoroughbred の生産、育成、調教及び遺伝的考察、有名牧場の経営形態、優秀な Thoroughbred の特徴について（Thoroughbred の総合的研究） 桜井 守正

225 笠井 武 養鶏の経営規模と所得の関係 吉村
148 平川 芳孝 養豚経営における損益分岐点について 吉村
150 広地 勉 群馬県における肉牛生産の現状と展望 吉村
168 町田 高明 遠隔地酪農と都市近郊酪農の収益性に関する研究 桜井 守正
5 安達 宏 群馬県における酪農の現状と展望 桜井 守正
9 池田 寿 牛乳の生産調整における諸問題について 桜井 守正
13 石川 清行 肉牛・肉豚における食肉生産の経営経済的優位性 桜井 守正
36 大嶋 衛 日本ミツバチとヨーロッパバチについての研究 桜井 守正
44 越智 圭吾 宮城県仙北地区における養豚のフン尿処理問題とその対策について 桜井 守正
46 小野寺 勇 豚肉の流通経路・形態に関する研究 桜井 守正
62 吉川 敏勝 都市近郊におけるフン尿処理方法の推移と今後の課題 桜井 守正
70 小林 正和

家畜飼養学研究室

今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ますます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養・管理・飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄麿助教授、栗原良雄講師、関恒雄副手を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼料作物関係、飼料管理等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分々析演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るために、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、関先生、大学院生四名、四年生二十名、三年生十七名である。

卒業論文題目

15 磯田 芳男 トウモロコシの窒素多肥栽培における硝酸態窒素化成菌抑制剤の硝酸態窒素生成抑制効果に関する研究 栗原 大谷

26 牛玖 裕一 摂取エネルギーの相違が幼雛のリノール酸の利用および諸器官中の脂肪酸組成におよぼす影響 伊藤 栗原

32 大石 達也 硝酸態窒素化成菌抑制使用がトウモロコシの収量及び一般成分に及ぼす影響 栗原 大谷

58 神田 孝 飼料中の粗繊維の形態・量の相違が幼雛の成長および消化率におよぼす影響 伊藤 栗原

59 菅野 次男 エネルギーレベルの相違が成長期の家兎の消化率におよぼす影響 伊藤 栗原

75 榊 文弘 主題：高速道路法面に於ける牧草栽培に関する研究 副題：生産草による家兎（アンゴラ種）の消化試験 伊藤 栗原

90 祐森 誠司 赤血球膜のアミノ酸透過に関する研究 杉村

100 染谷 正行 主題：高速道路法面に於ける牧草栽培に関する研究 副題：栽培試験 伊藤 栗原

110 田中 幸一 エネルギーレベルの相違が成長期の家兎の成長におよぼす影響 伊藤 栗原

111 田中 宏和 搾乳牛における農産製造粕類の飼料価値に関する研究 伊藤

116 塚田 正義 マイコプラズマ様微生物（MLO）に罹病したクローバの生育、収量及び一般成分 栗原

122 堂垣内伸一 エネルギーレベルの相違が成長期の家兎のエネルギー代謝におよぼす影響 伊藤 栗原

131 中村 一也 産卵鶏におけるミミズの飼料化に関する研究 杉村 栗原

138 橋本 彰人 主題：高速道路法面に於ける牧草栽培に関する研究 副題：生産草による家兎（アンゴラ種）の成長試験 伊藤 栗原

145 早野 明博 摂取エネルギーの相違が幼雛のエネルギー代謝におよぼす影響 伊藤 栗原

173 緑川 宏子 飼料中の粗繊維の型態・量の相違が幼雛のエネルギー代謝におよぼす影響 伊藤 栗原

178 宮野 丈彦 有機酸添加がサイレージの好気的変敗におよぼす影響 栗原 大谷

191 吉川 直隆 飼料中の粗繊維の型態・量の相違が幼雛の消化管および消化管内容物におよぼす影響 伊藤 栗原

200 橋本 吉男 摂取エネルギーの相違が幼雛の成長および諸器官重量におよぼす影響 伊藤 栗原

211 久保田 誠 有機酸添加がサイレージの好気的変敗過程中における硝酸態窒素の消失におよぼす影響 栗原 大谷

212 寺内 聖治 主題：麹飼料に関する基礎的研究 副題：麹飼料成分特に蛋白質の利用性について 淡谷

215 福田 毅 主題：未利用資源の飼料化に関する研究 副題：大豆煮汁（醸造廃棄物）吸着粕殻のめん羊給与が第一胃内性状におよぼす影響 淡谷

217 松田 勉 主題：放牧牛の行動に関する研究 副題：放牧地の草量及び気象条件が育成牛の行動に及ぼす影響について

家畜生理学研究室

ひと口に家畜生理学と言っても、その内容は余りに広く深いものです。当研究室では、特に「家畜・家禽の内分泌に関する研究」「家畜・家禽の代謝に関する研究」「家畜・家禽に関する免疫学的ならびに血清学的研究」の三つのテーマを柱として、渡辺誠喜教授の御指導のもと、学部四年次生十三名、三年次生十一名、二年次生一名が所属し、岩崎説雄副手、坂本彰司副手、ならびに中島功院生らと共に研究を行なっています。

実験動物として、緬羊・山羊・ウサギ・モルモット・ニワトリ・ウズラをあつかっており、中でもウズラでは、国立遺伝学研究所より特殊な系統のものをわけていただき、今後、遺伝学、血清学など様々な方向から追求してゆこうとしています。

小人数であるため、男女を問わず一人一人が重要な戦力となり、実験動物の飼養管理、その他研究室活動を進めなければならず、他の部屋よりも忙しい事や、研究室としての歴史が浅い。また、幽霊室員を許さない方針などで、嫌遠されがちとなる様ですが、各自が自分の個性を充分に発揮し、独創的な発想を生かすことのできる最良の場、若い研究室ならではの良さがココにあるのです。

家畜生理学研究室行事、毎週一回ゼミ・談話会・毎週二回動物舎のそうじ・新入室員歓迎会・学外講師による特別講演会・富士農場実習・研修旅行・卒業論文発表会その他

卒業論文題目

8 生田 敦之 豚の卵巣膿腫に関する研究 特に卵胞膿腫の形態的分類とろ胞液中の特異物質について 渡辺

14 石橋久仁彦 多摩動物公園象舎内に就時するドバト群の年間繁殖状況並びに生態に関する調査 渡辺

25 植松 太一 山羊の血液型に関する研究 渡辺

87 島村 功 マウス血清 IgG 産生に対する性ステロイドホルモン投与の影響 渡辺

91 洲沢 徹 ウズラの免疫担当臓器並びに血清IgG値に及ぼす性ステロイドホルモンの影響に関する研究 渡辺

104 武井 弘明 ウズラの体液性免疫応答に関する研究 特にIgG, IgM, IgA値について 渡辺

112 種茂 敏江 低酸度二等乳泌乳牛の二・三の血液性状に関する研究 渡辺

117 辻 秀憲 実験的高血糖値マウスの系統差に関する研究 渡辺

124 徳力かおる タンニン酸並びにホルマリン処理緬羊血球の回収率と血球抗原、カリウム型との関係に関する研究 渡辺

171 丸野師寿江 ニワトリの血清IgG量並びにIgM量に対する加齢並びに性ステロイドホルモン投与の影響 渡辺

185 山岡 俊幸 白血球遊走、肉芽形成、網内皮系機能に及ぼすステロイド剤の影響 渡辺

188 山下 英則 抗生物質並びにビタミンB群投与ウズラの体液性免疫に関する研究 渡辺

194 渡辺 剛一 抗生物質並びにビタミンB群投与ウズラの体液性免疫に関する研究 渡辺

家畜繁殖学研究室

当研究室では、一戸教授、石島教授、門司講師、岡本副手の指導のもとに、大学院生二名、四年生三十七名、三年生三十八名の室員で構成され、家禽班、牛班、豚班、実験動物班の四班に分かれ、室員はそれぞれ個々の役割分担のもとに、各動物に愛情をそそぎつつ、日夜、真理の追求を行なっております。

又、研究室の中だけでなく、世界へも目を向け、特に近年はフィリピン、スリランカ等の東南アジアにおける水牛、野鶏の研究が軌道に乗り、毎年室員を各地に派遣し、フィリピンにおける人工受精の確立及び、在来鶏、野鶏の生理を繁殖学的に究明せんと努力を積み重ねています。

更にお互いの知識を深める意味で、各班ごとに週一回のゼミナールがあり、文献を読んでの討論、現在注目を集めている報告について、卒論の説明その他、昼夜を問わず追求するという向学心をより一層高めています。

この様な活動の他に、毎日の当番制による各班の飼育管理、日本鶏審査会への参加、卒業論文発表、新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加（文化学術展示会、模擬店）、卒業生送別会等、これらの行事に室員は全員参加でより充実したものとなるよう、エネルギッシュな活動をつづけ、はっきりとその生活の中に足跡を印していきます。

研究的な立場の中に基礎をおき、そこに集う学生達の舞台が、家畜繁殖学研究室であります。

卒業論文題目

3 相原 毅 緬羊精子の形態について 一戸 丹羽

7 飯塚 直人 ホロホロ鳥の放卵パターンに対する明暗リズムの影響 一戸 西脇

17 伊東 健 Swamp Buffaloにおける精液の性状と精子生存性について 一戸 大谷

30 江川 優子 過排卵処理マウスの胎児生存性に及ぼす各種ホルモンの影響 石島

34 大窪 康貴 ラットにおける宮内胚の非外科的採取に関する研究 石島

35 大沢 隆 過排卵処理卵巣に出現する家兎血胞の成因に関する研究 石島

42 小川 富生 ウサギ胚の錠剤化凍結法の試み 石島

53 加藤 丈雄 ゴールデンハムスターの過剰妊娠に関する研究 ―特にPMS投与量の検討― 石島

71 斉藤 哲男 豚精液の凍結保存に関する研究 ―特に融解後の精子生存性について― 一戸 丹羽

73 斉藤 等 豚精液の凍結保存に関する研究 ―特に融解後の精子の形態について― 一戸 丹羽

80 佐藤 次男 乳牛の卵胞のう腫に関する研究 一戸

86 島田 信昭 豚精液の低温保存に関する研究 ―特に保存液が精子の生存性に及ぼす影響― 一戸 丹羽

88 白川 剛三 現代における農産物のもつ政経的意義 一戸 吉村

106 竹田 裕二 Swamp Buffalo精液の形態について 一戸 大谷

109 田島 泰利 ニホンウズラにおける血中Giucose, Colucium, Total Lipids及びB-Lipoprotein値の成長に伴う推移 一戸

115 塚田 拓 厚木農場における豚の分娩成績 一戸 鈴木

126 中井 雅史 牛精液における垂直凍結と水平凍結した精子の生存性の比較 一戸 荻原

129 中川 徹 豚精液の低温保存に関する研究 ―特に温度降下速度について― 一戸 丹羽

134 野口 文人 牛精液におけるストローの太さによる凍結後の精子の生存性について 一戸 荻原

135 野沢 典生 乳用育成牛の代償性発育に伴う一般血液性状の変化 一戸 小林

139 橋本 義明 豚舎汚染の実態調査 一戸 鈴木

149 平川 良弘 乳用育成牛の代償性発育に伴う成長関連ホルモンの変化 一戸 小林
152 福井 利明 雄牛の異常生殖器に関する研究 一戸
153 福田 茂男 繁殖雌豚の実態調査 一戸
158 藤崎 昇 山羊における精液性状と精子生存性について 一戸 丹羽
160 藤本 直美 緬羊における精液性状と精子生存性について 一戸 丹羽
164 本間 賢 雄鶏の血中Testosterone分泌に対するProlactin投与の影響 一戸
179 宮本 間勉 牛の過排伸誘起について 一戸
181 森下 靖 山羊精液の性状と保存に関する研究 一戸 丹羽
182 安井 彰 乳牛における繁殖障害について 一戸
186 山崎 一 豚精液の低温保存に関する研究 ―特に保存中における精子形態の観察― 一戸 丹羽
190 山本 藤生 牛の雄性生殖器に関する基礎的研究 一戸
197 渡辺 雄司 種豚の実態調査 一戸
199 植村 聖 スナネズミにおける受精卵子の体外培養に関する研究 石島
218 岩田 優 ホロホロ鳥の人工授精に関する研究 ―特に稀釈液に関する基礎的研究― 一戸 西脇
231 松永 淳 ウズラにおける成長に伴う各臓器の変化 一戸
233 吉田久満男 神奈川県内における繁殖障害の実態調査 一戸
237 池田 一彦 乳牛の飼料給与の相違による繁殖障害の発生傾向に関する調査 一戸

畜産物利用学（肉）研究室

畜産物利用学（肉）研究室は、通称「肉研」と呼ばれ鬼原教授、松岡講師の御指導のもとに、四年生二十名、三年生二十六名で構成されています。

今日の畜産界において、精肉加工肉を含めた食肉産業は、高い地位を占め、日々の発展成長が著しい部門です。

当研究室では、その食肉界に新聞を送り込むべく、肉及び肉製品の成分分析、筋肉の組織構造、発色経路と肉色の測定、肉及び肉製品の貯蔵法など、いわゆる「肉の化学」を微細に追求すべく活動しています。

この問題解決のためには昼夜を問わない、という室風が受け継がれ、四年生はその実験手伝い等に励んでいます。

また、収穫祭における肉製品の製造販売、その他一連の年中行事を通して、室員の親睦を深め、各自の自覚を持った行動で円滑な研究室の運営を築いている。

来業論文題目

19 岩井 徳道 食肉の栄養成分に関する研究 猪豚肉の一般成分および脂肪酸組成 松岡 鈴木（伸）
24 植田 潤 プレスハム凍結保存中の変化に関する研究 鬼原
54 神山 耕史 豚筋肉組織に対する再凍結の影響 松岡
56 川崎 隆 鶏卵タンパク質の耐熱性制御に関する研究 鬼原
63 木村 仁史 ソーセージの風味および保存性向上に関する研究 鬼原
72 斉藤 輝寿 醗酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響 松岡
79 佐藤 剛士 醗酵飼料の給与が豚肉質に及ぼす影響 松岡
108 田作 政司 ホロホロ鳥筋肉の特性に関する研究 筋肉中の遊離アミノ酸について 鬼原
119 坪田 勝由 再凍結豚肉の肉色に関する研究 松岡
120 寺田二三彦 家禽肉の肉漿タンパク質に関する研究 鬼原
125 鳥羽富美男 家禽肉の脂質に関する化学的研究 鬼原
127 長井 邦夫 豚筋肉組織に対する再凍結の影響 松岡
155 福原多賀志 豚肉の再凍結に関する研究 再凍結肉を使用した肉製品の品質について 松岡
162 堀田 秀紀 ホロホロ鳥筋肉の特性に関する研究 筋肉中のヌクレオチドについて 鬼原
163 堀江 鎌 凍結家禽肉の解凍に関する研究 鬼原
169 松井 基安 凍結畜肉の解凍に関する研究 鬼原
183 柳沢 良文 ロースハム凍結保存中の変化に関する研究 鬼原
184 矢部 哲司 ウズラ卵タンパク質の耐熱性制御に関する研究 鬼原
195 渡部徳一郎 家禽肉の脂質に関する化学的研究 鬼原
196 渡辺 秀雄 家禽肉の特性に関する研究 鬼原
227 角田 真一 ポークソーセージの冷凍保存中における変化について 鬼原

畜産物（乳）利用学研究室

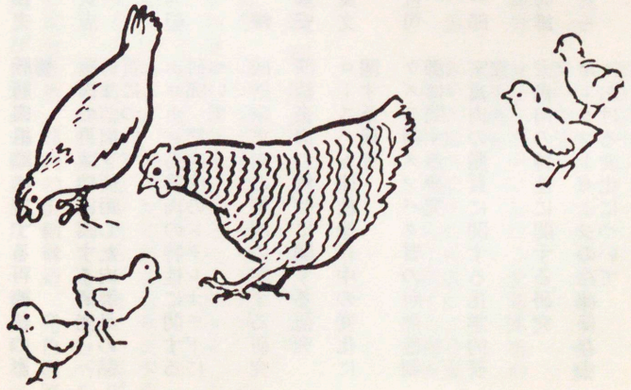
当研究室は、室長の山中良忠助教授、古川徳講師両先生の御指導のもとに、四年生四人、三年生九人、準室員二人という少数ながらも室員全員がそれぞれ協力しあい各自の研究題目に向って邁進しています。

主な活動は乳、乳製品及び卵、卵製品に関する理化学的、細菌学的研究等であり、クリーンベンチ、ガスクロマトグラフィー、液体クロマトグラフィー、分光光度計等が完備され高度な研究を可能にしています。

主な行事は毎月のゼミナール、五月に新入室員歓迎会夏には乳製品製造実習、秋には収穫祭参加、十二月に室員旅行、二月に卒業論文発表会、卒業生送別会等があります。

卒業論文題目

61	北村　勝行	ネパールにおける乳製品とその加工法　山中
161	古沢　寿美	乳酸菌のプロテアーゼ活性に及ぼす環境要因に関する研究　山中　古川
214	肱岡　竜二	チーズスラリーの熟成法の検討　古川
222	和泉　治本	チーズ熟成期間中の蛋白質とテクスチャーの変化　古川



畜友会だより

昭和56年度畜友会行事報告

1月10日	昭和56年度畜友会活動開始
2月　7日	4年生送別会
3月20日	卒業生記念品贈呈
4月　7日	入学式において畜友会の説明
4月21日～22日	新入生オリエンテーションにおいて畜友会の説明
4月25日	役員補充（寺田，山邊）
4月27日	新入生歓迎コンパ
5月11日	役員補充（岩渕，小室）
5月24日～26日	畜友会ソフトボール大会（第一回）
6月～7月	夏季個人農場リスト作成及び紹介
6月11日～20日	第11回学内スポーツ大会参加
6月20日	学内スポーツ大会慰労会
6月29日	第1回講演会 〈丹羽先生　－家畜人工授精の進歩と将来 ― 〉
7月20日	「ふじみの」編集委員会発足
8月　7日	1年生厚木農場においが収穫祭の説明
9月下旬～	「ふじみの」原稿募集
9月26日	畜産学科第89回収穫祭実行委員会発足
10月　5日	収穫祭本部開き 〈畜産学科第89回収穫祭統一本部発足〉
10月30日～11月3日	第89回収穫祭
11月30日	昭和56年度畜友会定期総会
12月　6日	畜友会ソフトボール大会（第2回）

昭和56年度畜友会会計報告

収入の部

	予算(円)	決算(円)	
前年度繰越金	264,543	264,543	
新入生	1,538,000	1,232,000	(8,000円×154名)
転科生	24,000	12,000	(6,000円× 2名)
編入生	40,000	32,000	(4,000円× 8名)
利息		10,251	
計	1,866,543	1,550,794	

支出の部

	予算(円)	決算(円)
卒業生送別会費	80,000	79,420
卒業生記念品費	130,000	64,050
新入生歓迎会費	80,000	66,503
新入生オリエンテーション費	20,000	21,140
「ふじみの」20号印刷費	360,000	360,000
講演会費	40,000	9,340
スポーツ大会費	120,000	96,275
学内スポーツ大会慰労会費	60,000	59,727
農場リスト費	5,000	4,630
収穫祭説明費	30,000	22,400
収穫祭援助費	470,000	470,000
コンパ援助費	50,000	0
総務費	50,000	44,404
予備費	371,543	0
計	1,866,543	1,297,889

(収入総額) 1,550,794円－(支出総額) 1,297,889円＝252,905円

上記相違ない事を認めます。

会計監査委員

4年 松本末広　　2年 岩崎洋一

2年 菅野泰　　1年 元井敬一

第89回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部

畜友会よりの援助金	470,000
前夜祭本部よりの援助金	21,000
体育祭本部よりの援助金	46,000
特別企画本部よりの援助金	37,000
収穫祭本部より北門への援助金	170,000
宣伝隊本部よりの援助金	10,000
	754,000

支出の部

	予算	援助金	決算
総務費	150,000		152,361
北門		170,000	173,576
前夜祭	25,000	21,000	46,167
体育祭	110,000	46,000	157,343
特別企画	45,000	37,000	85,090
宣伝ストーム	110,000	10,000	126,302
文化展	30,000		30,000
	470,000	284,000	770,839

(収入総額) 754,000－(支出総額) 770,839＝16,839 (赤字)

※赤字分は畜友会より補助されたい。

上記相違ない事を認めます。

4年 松本末広　　3年 岩崎洋一

2年 菅野泰　　1年 元井敬一

第八十九回収穫祭を終えて

出会いがあればいつかきっと別れがくる。それは自然の成り行きであって、だれもそれにさからうことができません。しかし私は、いやすべての人が人との出会や絆をいとおしむ。大学という一つの特殊な社会のなかで生活している私達にとって、出会いはあっても、絆が生まれるということはなかなかありません。そんななかで、収穫祭は私に出会いと絆というものを与えてくれました。収穫祭というのは学科対抗という形で行なわれていますが、それは又、収穫祭を成功させようと言う一つの共同体でもあります。約一ヶ月半の準備期間中、いろいろなことがありました。雨の中、みこしに使う竹を取りに行った事、朝方まで仕事をしたこと等々、想い出せばきりがありません。苦しかった事、かなしかった事、すべてが、いまとなってはなつかしい想い出として、私の心に刻まれています。そんな中で私は、一つの仕事をやりとげるのに個人の考えだけではやりとげられないとゆうことを知りました。一つの共同体といってもいろいろな人間があっまっています。考えかたもちがえば、性格もちがいます。ケンカもすれば、いがみあいもします。そんな中で、自分の意見を主張し、又、相手の意見も尊重する。時には自分をころし、相手の意見を一方的に取り入れなければならない時もあります。おたがいに汗にまみれ、努力することを知らない者どおしの間に、真の友情は生まれない、そしてこの、収穫祭という一つの共同体の中で、人と出会い、真の絆を持ちたい。だから私はこれからも人との出会いや絆を、おもいやりをもって、大切にしていきたいと想います。収穫祭が終了すると、毎年、ある一定の期間、収穫祭ボケというのがでてきます。何もかもがいやになったり、毎日がつまらなく感じられることがよくあります。そんな中で普段の自分をとりもどして生活してゆけるようになるすでには、けっこう時間がかかります。それほど収穫祭とはめまぐるしくいそがしい期間なのです。卒業しても又、収穫祭の時期になると、心は収穫祭にむいていることでしょう。

第八十九回収穫祭

前夜祭　「醜女哀歌」　第三位

脚本・構成　吉沢　寛　2年

キャスト

幸子　山邊　絵里子　1年
一郎　吉沢　寛　2年
愛　高田　肖子　2年
父　渡辺　恵一　2年

美人コンテスト　「波止場哀歌」

脚本　臂　吉浩　2年
構成　五十嵐　勝芳　2年

キャスト

サリー　渡辺　由樹　1年
モーリ　五十嵐　勝芳　2年
マスター　岩渕　守男　1年
警官　阿住　進　2年
店の客　小澤　真也　2年
〃　瀬古　真一　1年
弁士　河野　真治　1年

野外劇　「世代」

脚本　宍戸　寿　2年
構成　津田　新哉　2年

キャスト

徳男　瀬古　真一　1年
洋子　小室　藤華　1年
父　宍戸　寿　2年
母　竹尾　澄枝　2年
借金取り　山邊　絵里子　1年

先生のど自慢　「アラスカ魂」

石島　芳郎　先生

体育祭

総合　十二位
バックボード　「虎」
設計　阿住　進　2年
製作　岩渕　守男　1年
競技　十二位

昭和五十六年度第八十九回収穫祭
畜産学科統一本部役員

○統一委員長　柳井篤司　3年
　副委員長　遠藤正雄　3年
　副委員長　宍戸寿　2年

○宣伝ストーム統一委員長　小澤真也　2年
　副委員長　津田新哉　2年

○前夜祭統一委員長　宍戸寿　2年

○特別企画統一委員長　八重樫哲　3年
　副委員長　臂吉浩　2年

○北門アーチ統一委員長　倉橋正己　3年
　副委員長　小久保政弘　3年
　副委員長　小屋敷正実　3年

○文展模擬店統一委員長　柳井篤司　3年

○会計　河野真治　2年

○家畜苑統金委員長　遠藤正雄　3年

昭和五十六年度畜友会役員

顧問　田中一栄　教授
顧問　天野卓　講師

委員長　倉橋正己　3年（育種研）
副委員長　柳井篤司　3年（衛生研）
副委員長　阿住進　2年
会計　臂吉浩　2年
会計補佐　小室藤華　1年
企画　小澤真也　2年
企画　西野隆吉　2年
企画　岩渕守男　1年
書記　竹尾澄枝　2年
書記　寺田幸代　1年
渉外　遠藤正雄　3年（経営研）
渉外　宍戸寿　2年
庶務　山邊絵里子　2年
会計監査　松本末広　4年
会計監査　岩崎洋一　3年
会計監査　菅野泰　2年
会計監査　元井敬一　1年

東京農業大学畜産学科
〝畜友会〟規約

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称す。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。
一、正会員　二、特別会員
三、名誉会員
正会員は東京農業大学畜産学科在学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。
一、委員長一名、副委員長二名、書記二名
会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
三、監査員四名

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
（なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。）
三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。
但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
四、委任状の検査は役員が行なう。
五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条　定期総会は年一回十一月に召集する。
臨時総会は左記に該当した場合一ケ月以内に召集しなければならない。
一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第十七条　第四章　業務
第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。
一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第二十条　第五章　会計
会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。
但し入学取消しの場合はその限りではない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。
承認は定期総会において行なう。

第二十四条　第六章　監査
本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。
監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第二十七条　第七章　附則
本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

畜友会選挙規定

第一条　第一章　総則
この規定は、畜友会役員の選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条　この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員の選挙に適用される。

第三条　第二章　選挙管理委員会
第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条　本会は、畜友会役員の選出に関して全ての権限を有する。

第五条　本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。
ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高点を当選とする。

第六条　本会の委員の任期は原則として、畜友会の

事業年度に準ずるものとする。

第七条　本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならない。

第八条　畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員の選挙を行なう。

第三章　選　挙

第九条　選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条　一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。
二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条　選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条　選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条　選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条　選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条　投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。
(ロ) 投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。
(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。
(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

第十六条　投票場は選挙管理委員会が定める。

第十七条　開票は全投票終了後、ただちに行なう。
開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八条　左記の投票は無効とする。
(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。
(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。
(ハ) 選挙管理委員会が不明と認めたもの。

第十九条　畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条　当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条　立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二条　選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三条　選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四条　選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があってもこれに応じなければならない。

第四章　予算及び監査

第二十五条　畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六条　選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章　改　正

第二十七条　本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八条　本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九条　本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集部では〝ふじみの〟第二十二号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間　五十七年九月～十一月下旬

要　項
- 論文、随筆、紀行文、主張　四〇〇字詰～十枚以内
- 写真カット、は随意
- 表紙図案、三色以内

宛　名　東京都世田谷区桜丘一－一－一
東京農業大学畜産学科内
畜　友　会
ふじみの編集委員会行

発行日　昭和五十八年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会〝ふじみの〟
編集委員会
TEL（四二〇）二一三一(呼)

編集後記

今年で〃ふじみの〃も21回目になりました。ということは、二年生中心の編集委員よりも年上になります。我々は、この伝統ある〃ふじみの〃を皆様方に十分満足して戴くように、さまざまな企画を練りました。

編集中いろいろな困難もありました。そして、いろいろなバラエティーに富んだ原稿を頂き、例年にない〃ふじみの〃が出来上がりました。

最後になりましたが、我々委員一同の至らない点を、深くお詫びすると共に、おいそがしい所原稿をお寄せ下さった諸先生方ならびに会員諸氏に深く感謝いたします。

編集委員一同

昭和57年3月1日発行

“ふじみの” 第21号

編集責任者 五十嵐 勝 芳

発行者 倉 橋 正 己

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学畜友会
電話 (420) 2131(呼)

印刷所 世田谷区経堂1-6-13
エルデ・タイプ社
電話 (429) 1067